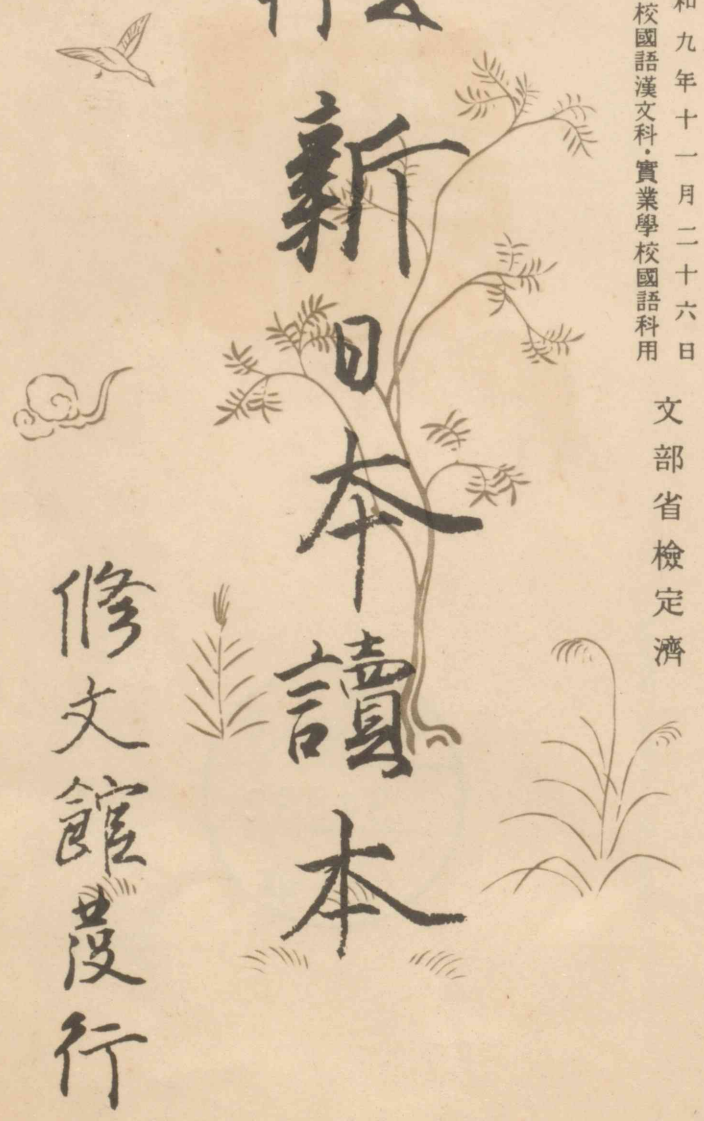
375.9
Yo19
資料室

五訂 新日本讀本 吉田彦麿編 四

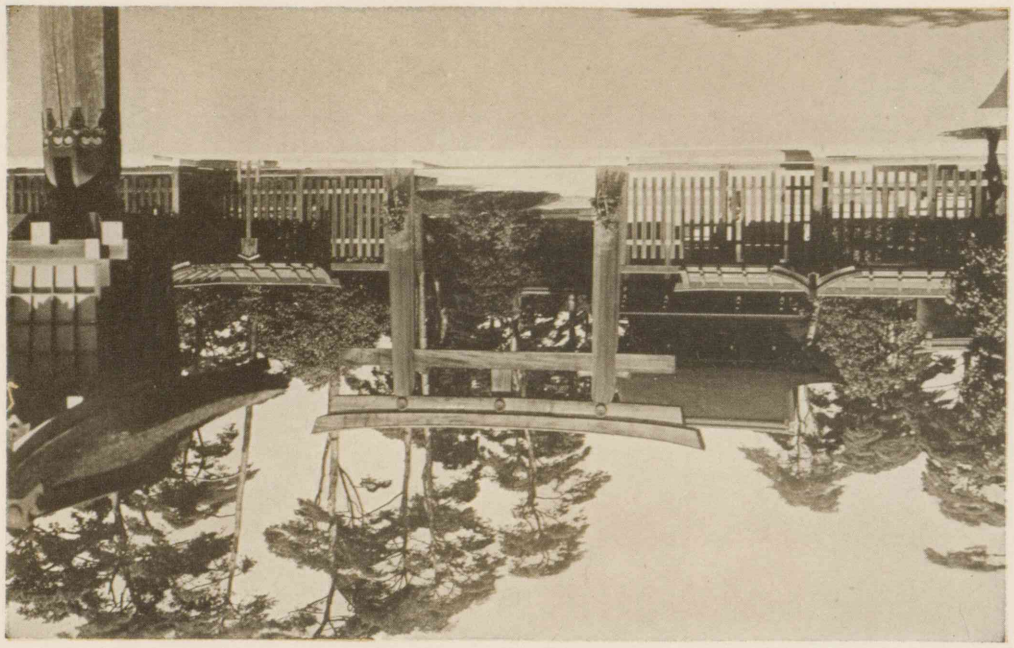
41440
教科書文庫
4
810
41-1934
200080
1703

資料室
375.9
Y01



又訂 新日本讀本

昭和九年十一月二十六日
中學校國語漢文科・實業學校國語科用
文部省檢定濟
修文館發行



（服參課壹第）　宮　神　治　明

広島大学
教養
34992
図書

編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

一　現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。

二　現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。

三　かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい。

以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について採訪嚴選し、それを適宜に鹽梅排列しました。

かくて國語愛から國家愛への道程を殘す所なく栞しつゝ、中等學校に於ける國語教育の完成に貢獻したいと祈つて止まないのであります。

昭和九年七月

編者識

卷四目次

一 明治神宮　溝口白羊　一
二 大皇子　北原白秋　一七
三 爽やかな心　河野省三　一九
四 美しい球　矢島鐘二　三〇
五 秋の讃美　上司小劍　三六
六 小園の記　正岡子規　四一
七 旅と歌と　佐佐木信綱　五一
八 秋の雨（諸家）　五八

一九 文章の道　島崎藤村　六一
一〇 句讀點　薄田泣菫　六八
一一 誠の說　（梅園叢書）　七三
一二 大石良雄　山路愛山　七七
一三 史傳を讀むべし　大町桂月　八九
一四 年中行事の興趣　編者　九三
一五 朝の海　吉田絃二郎　一〇三
一六 清福　貝原益軒　一一
一七 雪のわかれ　村井弦齋　一一六
一八 銀盤に躍る　木原均　一三六
一九 蜃氣樓　（東遊記）　一三五

二〇 雪國の春　相馬御風　一四〇
二一 我が袖の記　高山樗牛
一熱海の冬　一五〇
二三 保の春　一五三
二二 春の草　三木露風　一五四
二三 靈器日本刀　中山博道　一五六
二四 皇室と國民　芳賀矢一　一六四

目次——終——

廣島大學圖書之印

溝口白羊
名は駒造、大阪府の人、明治十四年生、文章家。

代々木
東京市澁谷區にある。

創

五訂 新日本讀本 卷四

一 明治神宮

溝口白羊

快美な色彩の反射と、柔らかい感觸とを有つ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森！　私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つた事だらう。　森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。　或時は、六

獻（献）

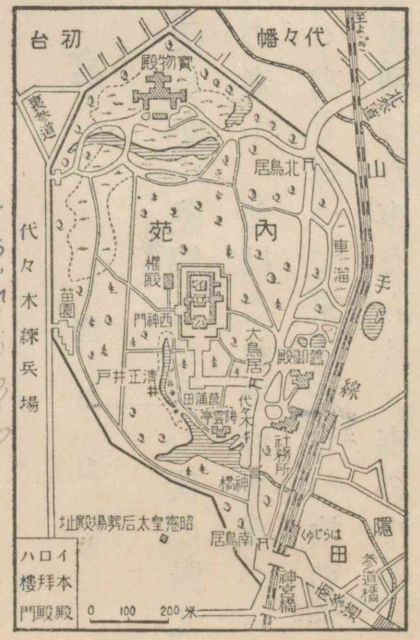
衝動

捗る。（終へる）

基礎

七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、曳々聲で森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ！　さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懷かしさで充溢された。そして、毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整

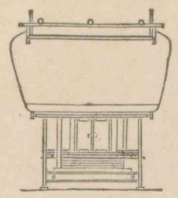


竣工

幽邃

象流造

神社建築の一種、側面を破風造とし、棟より前の軒先までを後の軒先までよりも長くして、向拜（參詣人が拜禮する所）をも併せ覆ふやうに造つたもの　流破風造。


正面

側面

つていくのが堪らないほど嬉しく思はれた。

その明治神宮がたうとう竣工した。營て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい日に光つてゐるのが見えた處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやら、すつかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

幽雅

延人員

尺〆

超越

明治天皇
第百二十二代、御名は睦仁、明治四十五年崩御、御年六十一。

神域！　眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅の領土。　私は始めて完成した明治神宮の神苑に立つた時、その改つた光景を見て、今さらのやうに强烈な感激に打たれた。　何者の力がこの新しい「建設」の事業を完成させたのだらう。　造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して、隱れた部面に働いた强い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、

昭憲皇太后
御名は美子、大正三年崩御、御年六十五。

懿德

海よりも深い昭憲皇太后の御懿德と、そして、この二柱の大神のお惠に對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが陰に陽に工程を捗らせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らせた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。

嗚呼！　純粹な至誠の動機から出た青年團員の造營奉仕、百里・二百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木。　それらは何事を語つてゐるか。　實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。　かうして殆ど全く國民の誠意を以て完成した

その宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんといふ美しい尊い事實だらう。今までの神社に曾て見たことのない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一歩々々、美しい小砂利の上を神殿に近く踏み入るに隨つて、いよ〳〵肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には、盡きることを知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥

清冽

萬成　岡山市内の西北方、萬成山。

筑波山　茨城縣、海拔八七六米。

錦

織細

斷え。（斷ゆ。）

居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致のいゝ細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅葉の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑中で、唯一の人工味を加へた處で、神苑の殆どすべてが織細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木の斷えた處に、千七百四十といふ驚くべき樹

明神鳥居
九頁下段圖參照。

原宿
東京市澁谷區。

千駄が谷
東京市澁谷區。

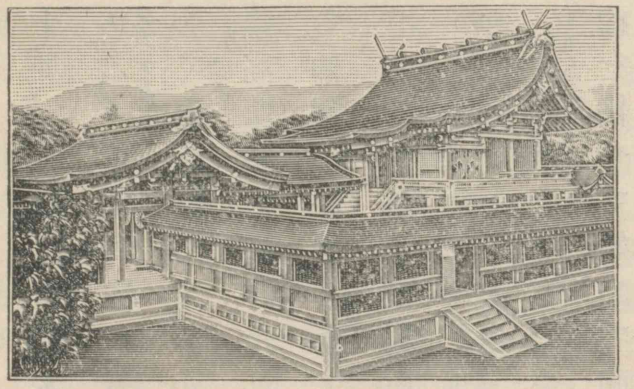
幅員

土佐繪
土佐權守春日經隆の創めた繪畫の一派。

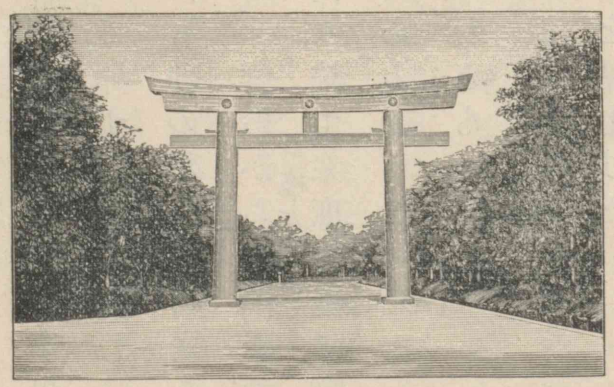
齡を重ねたといはれる、直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。

この鳥居のある處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄が谷方面から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした、土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

明治神宮全景



明治神宮本殿



大鳥居

木曾
長野縣西筑摩郡。

衆庶
何事の
西行法師が伊勢神宮に參拜した時に詠んだ歌。西行法師―俗名佐藤義清、歌僧、建久元年（一八五〇）寂、年七十三。
かたじけなし
默禱
終へて
（終りて）

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を併せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に登つて拜すると、芳ばしい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、卽ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖な場所である。

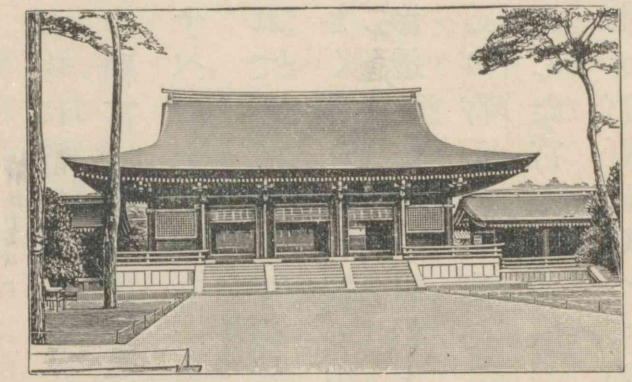
何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。
まあ、なんといふ明るい快い感じを有つた社殿だらう。

淺露
滲透
蟠
舊弊

今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、しかし陰鬱な感じを漂はせてゐる中に、この神宮ばかりは隱すところのない心持で、十分な光線にすべてを解放しすべてを暴露して見せてゐる。然も、それでゐて、決して淺露な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威力が迫り寄るのを覺える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようと

潤達
均齊
便殿



拜殿

お努め遊ばされた明治天皇の活動的・進取的の潤達な御氣象に對して、その明るいお宮の感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合はせてゐる樣に思はれる。拜殿を中心にして、左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして、その奥に便殿の遠く望まれる心持、それらすべてがまたたとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

八幡製鐵所
福岡縣八幡市にある。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亙る森林帶があつて、その向う、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、また莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹のまじつてゐるのが少からず目に著く。

寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八

池塘　枡形　木柵　弄（廾）

幡製鐵所製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて、若々しい楓の樹が美しく植ゑ列ねてある。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右兩側にある古雅な木柵を繞らした一構は、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑內の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも極めて御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝで、殊更技巧を弄しないところになんともい

へない優雅な趣致がある。この御苑は、祭神二柱の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高くそびえてゐる松を背景にして、芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連なりつゞいてゐる楝や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。

私は此等を一わたり拜見し廻つて、涙ぐましいほどの強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので、御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりは、もうすつかり深い靄に包まれて、黑々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が

鑄

文法

來る　流れる　竣工する　ある　快い　新しい　明るい

暮れ殘つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、何時までも、長く鑄つけられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な幽邃な優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。

（明治神宮紀）

二　大皇子

北原白秋

匂ひだつ紅の旗雲
霜凪よ奥の　中空
日の出ちかく、この朝
生れましぬ大皇子。

無線塔野には高きに
水晶と光るものあり
げにもめでた、この朝
御眼開かす　大皇子。

世に一の幸と御位

神ながらそなへます
天津日嗣　この君
日の本の　大皇子。

母といふ
尊しよ國母陛下
けふのよき日その御手
抱きます　大皇子。

玉のごと清くますよは
まさるもの絶えてあらじな
光あり　この國
榮えませ　大皇子。

河野省三
埼玉縣の人、明治十五年生、國學者、文學博士、國學院大學教授。

清淨

三　爽やかな心

河野省三

私どもは晴れた日に東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴れ〴〵したみやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひら〳〵と飜つてゐるのを見ますと、そこに活動的な活き〳〵とした氣分が起つてくるのであります。或はまた明治神宮に參拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な參道を吸込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿の前にまゐりま

濠

すと、自ら清々しい尊い氣分につゝまれてくるのであります。更にまた松の綠の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御隆盛を思ひますと、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。

富士山の雄姿

これ等の神々しい、清々しい、晴晴しい心持こそ、實に我々日本人が、遠いく昔から養つて來た心の眞の姿であります。

建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は、

眞髓

心なりけり

全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力强い氣分の充ち滿ちた心が、卽ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとく爽やかに
持たまほしきは心なりけり

とお詠みあそばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さずかやうな純眞な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當

屈託
排斥
天眞爛漫

りましても、最も必要な氣分であり、且價値のある態度は、誠にこの爽やかな心にあります。

この爽やかな心は、晴れ〳〵しい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、またみだりに他を排斥しない穩やかな心であります。この心からして、かたよりのない、爽やかな氣分を味はふことができるのであります。爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。溫味のある、生々とした生活は、最も望ましい世の中であります。僞らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあると信じますが、天眞爛漫は卽ち爽やかな心の本體であります。

建設的
根柢
柢—底
神道

爽やかな心は、かく清らかで、溫味のある、生き〳〵とした心持でありまして、建設的に、有意義に、總べての物を生かしてゆく所の積極的精神であります。所謂「朝日の豐榮昇る」氣分が、卽ちこの爽やかなる心の働きであります。

我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、卽ちこの爽やかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の說がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な氣分に生きる所の日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

風靡

本居宣長
鈴の屋と號す、伊勢國（三重縣）松阪の人、國學者、享和元年（三四六）歿、年七十二。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松坂にあつて、天下の學界を風靡（なびかせた）した本邦空前の大學者本居宣長でありますが、その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人問はば
朝日に匂ふ山ざくら花

とありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゝへたものであります。（あらはす）宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髄を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗はしさ、眞心の尊さを説いた人で

あります。（いつはる）さうして、ひたすらに我が國家を愛する道を力強く主張した人であります。

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした（あつさりとした）眺であります。嫌味（あくみ）とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明るく（ふつりゆくつな）淨く正しく直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はこゝにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家

経典
簡素

五十鈴川
皇大神宮の傍を過ぎ、北に流れて西二見村に注ぐ。

を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐることは明らかであります。神社は我が神道を形に生かした經典でありまして、彼の鳥居といひ、鎭守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたしますと、私たちの心は、自ら清々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に、五十鈴川の清い流のほとりに、二千年の昔から鎭座ます皇大神宮に詣りますと、何人も西行法師と同じやうに、

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるる

情操
心ともがな

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、卽ち日本人の神に對するありのまゝの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

淺みどり澄みわたりたる大空の
ひろきをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも清らかに爽やかな大御心を偲び奉らざるを得ないのであります。思へば、もう十數年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。

徐生薑

それは明治天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さい田舍町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つたところに並びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に遲れた町民たちは、いづれも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて、伏拜みましたが、やがて徐に左の小脇から綺麗に束ねた一把の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一歩退いて一

文法

まれる
たなる
自然にいい
最も
一途に

禮して立去つたのであります。これを目擊しました私は、誠に涙ぐましい感にうたれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゝへられてゐるのであります　私たちは、この心を日々の生活につつしまして、物を清らかにし、心を爽やかにして、僞らざる力強い社會を築いてゆきたいものであります。　私はこの爽やかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

（ラヂオ講演集）

矢島鐘二　群馬縣の人、明治十六年生、前兵庫縣體育主事。

戰　大正十年九月、米國フォレストヒルの庭球デヴィスカップ戰に於ける清水善造と米國選手チルデンとの試合。

漂うて

鮨詰

清水君　名は善造、群馬縣の人、明治二十四年生、三井物産會社員。

映え。（映ゆ。）

四　美しい球

矢島鐘二

戰の幕は切つて落されました。こゝ紐育を距る二十哩、理想的運動場として有名なフォレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂うてゐました。老幼男女を問はず、世界各國の人が、鮨詰のやうにひし〳〵とグラウンドの周圍に寄せ重なつて、この展開された場面に、兩選手の出場するのを待ち構へてゐました。チルデン君の上に幸福あれと祈る人の心と、清水君の上に光榮あれと祈る人の心とが、平和な光の中に照り映えてゐました。

凜乎

慘憺

苦衷（衣）

異口同音

囁―呟

火蓋を切る

虛

龍虎の爭

冱え。（冱ゆ。）

忙しさうに

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜乎たる決意と慘憺たる苦衷とを想はせながら、二君は微笑を浮かべて、テニスコートに現れました。チルデン君は身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分ですから、まるで大人に子供が立合つたやうでありました。觀覽席で、異口同音に、「氣の毒だが、清水君は駄目だらう。」と、囁くのが、清水君の耳に聞えました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虛を衝く龍虎の爭が始りました。秒一秒、チルデン君と清水君との球は共に冱えて來ました。觀覽者は、その球の動くまゝに、碧の瞳を忙しさうに動かしてゐました。その瞳に、傷はしや片

蹈辷（國字）　驚倒　躍起　歡—勸　眉宇　蔑（卿）

足蹈み辷らしたチルデン君の取亂した姿が映りました。米國人は驚倒しました、躍起となりました。この時でした、清水君はチルデン君の血走つた目先に、取亂した足許に、柔らかい程のよい球を送つてやりました。この瞬間に於ける清水君は、名譽の感情も、自尊の意氣も、全くその念頭に持つてはゐませんでした。「ミスターシミヅ！」といふ歡呼の聲と共に、米國人三萬の手が林のやうに一齊に振上げられました。あゝ、この一事、清水君も清水君ですが、米國人も米國人であると思ひました。

初めコートに出た時、チルデン君の眉宇の間には、清水君に對する侮蔑の情があり〳〵と浮かんでゐましたので、心ある米國人は、少からず不安の念を懷いてゐたやうでありました。

報いる。（報ゆ。）　ありません。　情誼　贔負　推奬

ところが、清水君は出場早々、この冷たい侮蔑に報いるのに、溫情春のやうな球を以てしたのでありますから、その深切は電氣のやうに米國人の胸にも響いて、感謝、感激が心の底から湧き上つたことでありませう。英國人などは清水君が永らく印度に在職してゐた關係もあり、日英同盟の情誼もあり、日本の應援者の少い關係も手傳つたからではありませうが、すつかり清水贔負になつて、盛んに君を推奬して歡呼しました。當時紐育には群馬縣人が五十五人ゐましたが、謂はゆる上州長脇差の氣象から、この日は總動員で應援に參加して、盛ん

互雄

勝を制す
開闘
デヴィスカップ

に歡呼しました。この敵味方總掛りの歡呼は、清水君の單なる妙技に對して發したのではなくして、その精神に對する力强い感激から發動したのであります。時は一點一分を爭ふ時でありました。五月六月・七月・八月の四箇月に亙り、十二箇國の選手を薙ぎ倒して、最後の決勝に入つた時でありました。若し今明二日間の米國選手との競技に於て勝を制したなら、日本開闘以來のデヴィスカップを獲得することの出來る時でありました　この時に於て、チルデン君の心中を察して、同情のある球を送つた清水君は實に偉いと思ひます。特に清水君が謂はゆる「汝は汝にして汝にあらず。」で、日本を背負つて立つ

釋迦
中印度、カピラ王國の淨飯王の子、佛教の祖、西紀前四七年、入滅、年八十。

孔子
名は丘、字は仲尼、支那魯の人、儒教の祖　周の敬王四十一年（西紀前四七九）卒、年七十三。

無援孤立

精華

てゐる事を自覺して執つた態度は、實に敬服する外はありません。

人格の修養といつて、いきなり釋迦や孔子の眞似をしようと思つても、なか〳〵困難であります。私共に取つて最も手近な修養法は、互に深切を盡くしあひ同情をしあふことであります。金錢を粗末に遣へば、貧乏になつて生活に困り、身體を粗末にすれば、病氣になつて苦しみます。深切同情の心を疎にすれば、終には無援孤立の窮境に陷ります。我が清水善造君のこの運動道德の精神、貴く美しい球の精華は、蓋し不朽の光輝のあるものと信じます。

（スポーツマンの精神）

上司小劍
名は延貴、奈良市の人、明治七年生、小説家。

凋落

蜻蛉

五　秋の讃美

上司小劍

秋は物の凋落を意味するやうに、昔から人々の頭を支配して來たけれど、凋落の裡に復興の氣が溢れてゐるのを見のがすことは出來ない。

澄み切つた大氣。……それは獨り秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つ〳〵磨きあげられたやうに鮮やかな光を放つ。遠くにあつた山は近くに引寄せられた如く、近くの野はいよ〳〵近く、呼べば應へんばかりである。

秋晴の日に赤蜻蛉の飛び交ふのを見るのは風情のあ

情風の秋

星辰

恒星

るものだ。秋の太陽は春の太陽よりも人に優しい。日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と人間が融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔らかい光がまづ夕涼の客に親しむ。團扇片手に顏を掩うて、「お星さま、ばあ。ゐない、ゐない、ばあ。」を、宵の明星に向つてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

天體の鮮やかに仰がれる秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは覺えてゐて、恒星と惑星の區別くらゐは誰にでも出來る。北斗七星をまづ數へて、次には天の川を見る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉
姓は松尾、名は宗房、伊賀國（三重縣）の人、俳人、元祿七年（一六九四）歿、年五十一。

鳴立つ澤
心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ澤の秋の夕暮。

芭蕉野分して
芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな。

寒鴉

の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。

古來の詩人といふ詩人は、皆天體に親しみをもつてゐる。遠い〳〵月や星をば、地上の動物や植物のやうに自分の友達として見る。牽牛・織女の話など、いかにも人と天體のゆかしい融合を語るものではないか。これも秋の情趣の一つであらう。寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。「鳴立つ澤の秋の夕暮」の西行法師や「芭蕉野分して盥に雨をきく」芭蕉なんど、皆秋の詩人と稱し得る。枯木寒鴉の寂しみに生きる芭蕉は、秋といふよりも寧ろ初冬の情趣に生きた詩人といはなければならないが、彼の讃美した時雨・枯野なんど、

感傷的
明月を抱いて
飛仙ヲ挾ンデ遨遊シ、明月ヲ抱キテ長ヘニ終ヘン。

蘇東坡
名は軾、東坡は號、支那宋代の文章家、建中靖國元年（西暦一一〇一）歿、年六十六。

深川
今の東京市深川區。

池をめぐりて
明月や池をめぐりて夜もすがら。

俳諧の季に於ては冬に屬するけれど、情緒の上からはどうしても秋である。澄み切つた、さうして寂しみのある秋といふ時季あるが故に、よく生きて來たとでも言はなければならない詩人が日本には多い。

天體の一つとして最も我々の世界に近い月は、昔から多くの詩人によつて讃美された。わけても東洋の詩人は、月に向つて感傷的な言葉を投げてゐる。さうしてそれがすべて秋に於てである。月といへばもう秋のものといふ氣がするではないか。「明月を抱いて……」の名句を赤壁の賦に殘した蘇東坡の秋を讃美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に明月を仰ぎつゝ、たゞ一人「池をめぐ

りて夜もすがら」の寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

星辰の鮮やかに仰がれる秋の夜には、巷の天文學者がなか〳〵多くある。我々が天體に對して絶えず考へてゐることは、あの自由な組織である。毫も個々の自由を束縛されずに、殆ど絶對自由の中に、一定の軌道をめぐつてゐる星の姿が羨ましい。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、だらしなさ。……そんなことを考へるのもまた秋の夜の感傷の一つで、澄み切つた空なればこそ、天體に對して讃美の聲が起るのである。天體の讃美卽ち秋の讃美であらう。

文法
意味する
應へる
見る
仰ぐ
う（助動詞）
よう
殆ど
鮮やかに
毫も

六 小園の記

正岡子規

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて、上野の杉を垣の外に控へたり。場末の家まばらに建てられたれば、青空は庭の外にひろがりて、雲行き鳥翔る樣もいとゆたかに眺めらる。始めてこゝに移りし頃は、僅に竹藪を開きたる跡とおぼしく、草も木もなき裸の庭なりしを、やがて家主なる人の小松三本を植ゑて稍、物めかしたるに、隣の老嫗の與へたる薔薇の苗さへ植ゑ添へて、四五輪の花に吟興を鼓せらるゝことも多かりき。

一年軍に從ひて金州に渡りしが、その歸途病を得て、須

正岡子規
名は常規、松山市の人、俳人・歌人、明治三十五年歿、年三十六。

小園
東京市下谷區上根岸町。

老嫗

一年
明治二十八年。

金州
關東州の都邑。

將に……する頃

三逕就レ荒云々
三逕荒ニ就キテ松菊猶存ス。（陶淵明、歸去來辭）

募

獄窓

呻吟

磨に、故郷に、思はぬ日を費し、半年を經て家に歸り著きし時は、秋將に暮れんとする頃なりき。庭の面去年よりは遙かにさびまさりて、白菊の一もと二もとねぢくれて咲き亂れたる、この景に對して靜かに昨日を思へば、萬感そぞろに胸に塞がり、辛き命を助りて歸りし身の衰へは、だこのうれしさに勝たれて、思はず、「三逕就荒。」と口ずさむも涙がちなり。ありふれたるこの花、狹くるしきこの庭が、かくまで人を感ぜしめんとは曾て思ひよらざりき。ましてこれより後、病いよ〳〵募りて足立たず、門を出づる能はざるに至りし今、小園は我が天地にして、草花は我が唯一の詩料となりぬ。我をして幾何か獄窓に呻吟するにまさると思はしむるものは、この十歩の地と數種の芳葩とあるがために外ならず。

芳葩

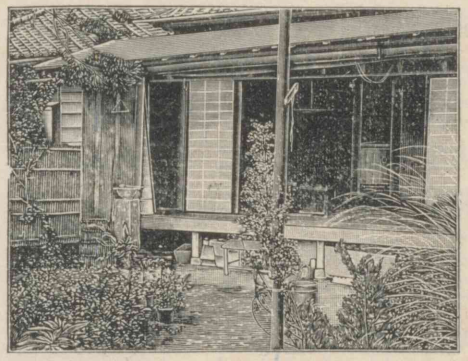
侵逞椎

醉うたる……

次の年、春暖漸く催して、鳥の聲いとうらゝかに聞えしある日、病の窓を開きて端近くにじり出で、讀書に勞れたる目を遊ばすに、いきゝしたる草木の生氣は手のひらの程の中にも動きて、まだ薄寒き風のひやゝと病衣の隙を侵すも、いと心地よく覺ゆ。これも隣の嫗より貰ひしといふ萩の刈株、寸ばかりの綠をふいて、逞しき勢は秋の色も思はる。眞晝過より夕陽椎の樹に落つるまで、何を見るともなく、醉うたるが如く、勞れたるが如く、うつとりとして日を暮すことさへ多かり。

越え。（越ゆ。）

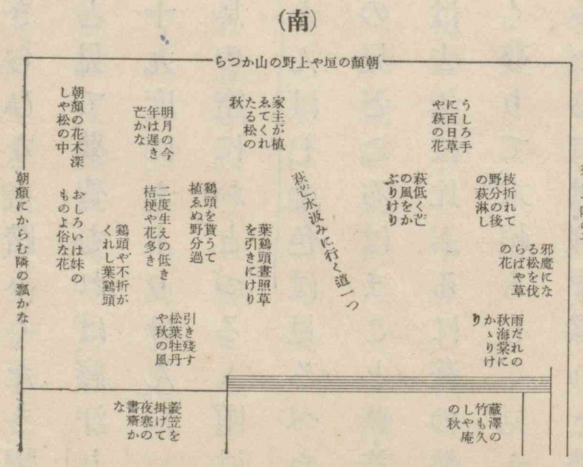
今まで病と寒氣とに惱まされて、弱りつくしたる我は、この時新に生命を與へられたる小兒の如く、これより萩の芽と共に健全に育つべしと思へり。折ふし黄なる蝶の飛び來りて、垣根に花をあさるを見ては、そゞろに我が魂の自ら動き出でて、共に花を尋ね、香を探り、物の芽にとまりて、しばし羽を休むるかと思へば、低き杉垣を越えて隣の庭をうちめぐり、再び舞ひ戻りて、松の梢にひら〳〵、水鉢の上にひら〳〵、一吹き風に吹きつれて、高く吹かれなが

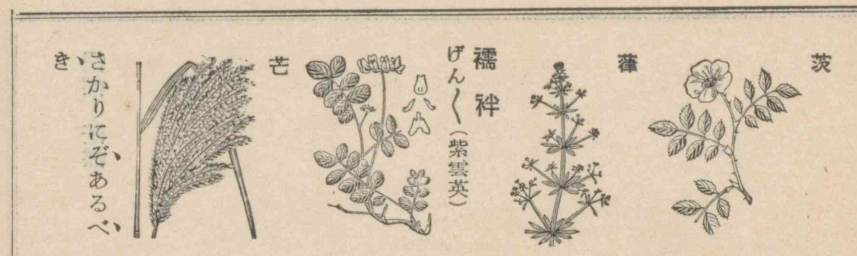


子規庵

惘然―茫然

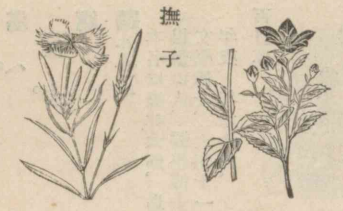
ら、向うの屋根に隱れたる時、我にもあらず惘然として自失す。忽ち心づけば、身に熱氣を感じて、心地なやましく、内に入り、障子たつると共に、蒲團引被れば、夢にもあらず幻にもあらず、身は廣く限り無き原野の中にありて、今飛び去りし蝶と共に狂ひまはる。狂ふにつけて、何處ともなく數百の蝶の群れ來りて遊ぶをつら〳〵見れば、蝶と見しは皆小さき神の子なり。





空に響く樂の音につれて、彼等は躍りつゝ舞ひ上り飛び行くに、我もおくれじと茨・葎のきらひなく踏みくだき、躍り越え、思はず野川に落ちしよと見て、夢覺むれば、寢汗したゝかに襦袢を濡して、熱は三十九度にや上りけん。

げんゝの花盛り過ぎて、時鳥の空におとづるゝ頃は、赤き薔薇、白き薔薇咲きみちて、かんばしき色は見るべき趣なきにはあらねど、我が小園の見どころは、まこと萩・芒のさかりにぞあるべき。今年は去年に比ぶるに、萩の勢強く、夏の初の枝ぶりさへいたく蔓りて、末頼もしく見えぬ。葉の色も去年のやゝ黄ばみたるには似ず、綠いと濃し。空晴れたる日は、椅子をそのほとりに据ゑさせ、人に



扶けられて、やうやくその椅子にたどりつき、氣晴しがてら萩の芽につきたる小さき蟲を取りしことも、一度二度にはあらず。

桔梗・撫子は實となり、朝顏は花の稍少くなりし八月の末より、待ちに待ちし萩は一つ二つ綻び初めたり。飛び立つばかりの嬉しさに指折りて、あすは四つ、あさつては八つ、十日目には千になるらんと思ひ設けし程こそあれ、ある夜野分の風烈しく吹き出でぬ。安からぬ夢を結びて、あくる朝、日たけて眠より覺むれば、庭に何やらのゝしる聲す。心もとなく這ひ出でて、何ぞと問ふ。今までさしも茂りたる萩の枝、大方折れしをれたるなりけり。ひ

おろかなりや、
野分にだに、
ならざりしを、

湛へ。
（湛ふ。）

腐

鷗外漁史
本名は森林太郎、島根縣の人、醫學博士、文學博士、大正十一年歿、年六十三。

百日草

たと胸つぶれて、いかにせばやと思へどせんなし。かくと知りせば、枝に杖立てて置かましをなど悔ゆるもおろかなりや。瓦吹き飛ばしたる去年の野分にだにかうはならざりしを、今年の風は萩のために方角や悪しかりけん。この日は晴れわたり、稍秋氣を覺え初めしが、我は例の椅子を庭に据ゑさせ、バケツと金盥に水を湛へて、折れ殘りたる萩の泥を洗ひたりしかど、空しく足の痛みを增したるばかりにて、泥つきし枝のさきは、蕾腐りて終に花咲くことなかりき。園中何事もなきは、只松と芒とのみ。

去年の春、彼岸やゝ過ぎし頃と覺ゆ。鷗外漁史より草花の種幾袋贈られしを、すぐに播きつけしが、百日草の外

葉鷄頭

な（る）**めり**、

は何も生えずしてやみぬ。中にも葉鷄頭のほしかりしを、いと口をしく思ひしが、何とかしけん、今年夏の頃、怪しき芽をあらはしもものあり。去年葉鷄頭の種を埋めしあたりなれば、必定それなめりと、竹を立てて大事に育てしに、果して二葉より赤き色を見せぬ。嬉しくて、あたりの畫照草など引きのけ、やう〳〵尺餘になりし頃、野分荒れしかばこればかり氣遣ひしに、思ひの外に萩は折れて、葉鷄頭は少し傾きしばかりなり。扶け起して竹杖に縛りなどせしかば恙なくて、今は二尺ばかりになりぬ。痩せてよろ〳〵としながら、なほ燃ゆるが如き紅しだれていとうつくし。二三日ありて、向うの家より貰ひ來れり

とて、肥えふとりたる鷄頭四本ばかり植ゑ添へたり。その次の日なりけん、朝まだきに裏戸を叩く聲あり。戸を開けば、不折子が大きなる葉鷄頭一本ひつさげて來りしなりけり。朝霧に濡れつゝ、手づから植ゑて去りぬ。鷄頭・葉鷄頭かゞやくばかり華やかなる秋に壓されて、萩はやや散りがちなるもあはれ深し。薔薇・萩・芒・桔梗などをくれて我が小樂地の創造に力ありし隣の老嫗は、その後移りて他に在りしが、今年秋風に先立ちてみまかりしとぞ聞えし。

ごて〳〵と草花植ゑし小庭かな

（子規隨筆）

不折　姓は中村、名は鉾太郎、長野縣の人、慶應二年（一八六六）生、洋畫家。

みまかりしとぞ、聞えし

文法

たり
き
ん（む）
り
け
ん
ぬ
ず

佐佐木信綱　號は竹柏園、三重縣の人、明治五年生、歌人、文學博士。

刺―刺
潑刺

七　旅と歌と

佐佐木信綱

旅行の樂しみは、想像しただけでも人の心を惹きつけてしまふ。殊に益、複雜繁多になつて行く大都會の生活に浸つてゐる人々にとつては、旅行は何にもました慰めである。心を本當に落ちつかせることのない實生活から逃れ出て、自然の中へ入り込めば、それだけでもう人の心は、新鮮な刺戟に蘇つてくるのを感じるであらう。この潑刺とした蘇生を味はふだけでも、旅行は十分喜ばれる價値をもつてゐる。ましてそこには、未知のものを始めて探る喜びや、自分だけの氣持を樂々と味はふ事の出

いとほしむ

かれいひ　乾飯。

萱

來る心安さも加つてゐる。その上、史蹟や名所、珍奇な風俗や言語等が、遠く家を離れて旅に出たといふ感じを深くすれば、人の心は自ら曇りなく淨められて、素直な氣持で目に觸れ、耳に聞く所のものをいとほしむのである。

それにつけても、昔の旅を今でも想像させる「草枕」といふ言葉が、すぐに心に浮かんで來る。今こそ交通機關と旅宿とが發達したけれども、徒歩でか馬の背でしか旅する事の出來なかつた昔の旅行では、かれいひを準備したり、或は萱を刈り敷いて、露けき假寢をするなどといふ事も、歌の詞の上での遊戯でなく、本當にあつたのである。それにも係らず、昔から旅を喜び、旅に憧れた人達は、古今東西に渡つて極めて數多い。日本だけに限つて見ても、まだ交通も十分に開けなかつた萬葉集の時代の歌には、旅の感情を歌つたものが澤山ある。能因も旅をしたし、西行も旅をした。宗祇や芭蕉は旅から離せない因緣になつてゐる。西行が夏に畿内を發足し、鎌倉を通つて秀衡の屋敷に著いた時には、すでに雪が降りしきる頃となつてゐた。よい草鞋とよい宿とを希ひながら芭蕉が旅した時には、いつわが舊宅へ歸るといふあてはなかつた。そんなにして迄、昔の人が不便な旅を忘れ難く懷かしんだ憧れの心は、今の都會生活を送る人には一層捨て難く、はつきりと理解する事が出來るであらう。

萬葉集の時代　わが國最古の歌集萬葉集の撰せられた時代。

能因　俗姓橘永愛、白河天皇の御代（一七三―一七四〇）頃の歌僧、生歿年未詳。

宗祇　俗姓飯尾氏、室町時代の和歌連歌師、文龜二年（一四六二）歿、年八十二。

秀衡　藤原氏、基衡の子、奥羽方面の豪族、文治三年（一八七）歿。

驛馬の鈴

たとへば夏の休に、高山や海邊を旅することは最もよい。さうでなくて所用の爲にする旅行でも、一時間ばかり汽車に搖られれば、もうすつかり旅行氣分になつてしまふ。その時の心の持ち方一つでは、所用の爲の旅行でも、それに深い意味を持たせて、つく〴〵と旅情のこまやかさを感じる事も出來る。急ぎの用でないならば途中下車をして、沿線から數里の所迄外れて見るのも面白い。交通の開けた今の日本では、鐵道から數十里も離れた場所などは、さうあるものではない。それに以前はがた馬車の喇叭の響いた街道にも、驛馬の鈴の音が木の間を洩れた峠路にも、自動車の便がある。三十分も搖られると、

峽谷
丘陵
森嚴壯麗
明澄透徹

都會の人が想像だもしない昔の姿そのまゝの岬や、山や、峽谷や、丘陵やに連れていつてくれる。忙しい生活の中で感じもしなかつた森嚴壯麗な景色や、明澄透徹の感じが、不思議にひた〳〵と心に迫り、心はまた、不思議にときほごされて、自然の中に流れて行くのを覺えるであらう。

この心持は、旅に親しむもののみが惠まれた特權であると思ふ。實際、丘陵性の半島を自動車で横ぎるなどは面白い。夕ばえのかゞやかしい夏の午後、白い鷗ときそひつゝ發動機船の岬角をめぐるのも面白い。眞夏溪谷を旅するのもよいし、秋の密林を露にぬれつゝ峠越しするのも樂しいものである。夏に疲れた草が靜かに眠つ

て、薄のま新しい穂が白く見える丘や、蛇苺の赤い初夏の土手の樹蔭で、蝮取りの笛を聞くと、夢の様な世界が胸に浮かんでくる。旅は心の故里へ人を誘つて行く。しかして、人の心を不思議なほど解きほごして、子供にし、感じやすくする。旅に淨められた人の心は、皆ひとかどの歌人の心になつてゐる。歌よむ人は平素にもまして、すなほな純情の歌をよむ事が出來、歌をよまぬ人の心も、歌よままほしい子供心にかへつて來るのである。

しかして歌よむ人は、旅の途上の感懷を一首の短い歌に托して、永遠の記念碑をこゝかしこに建ててくる。それは尊い道標であり、これを建てる喜びは、人生に於ける

鑑賞

曠野

文法

つくづくと
一層
殊に
自ら
極めて

最大の喜びの一つである。鑑賞も出來、創作力もある人は、自分からして、荒れた曠野にも、雲ゐる峰にも、心の記念碑を建てて行く。たとへ創作をしない人でも、旅に心を休めるほどの趣味と、鑑賞力とのある人ならば、自分が今辿りつゝある山や、林や、海岸について、我が心に訴へる様な名作の存する時は、それに育まれて、一入の喜びを感じる事も出來るであらう。

旅は人の心を淨め、人をおしなべて詩人としてくれる。であるから、歌よむ人は一層歌人となり、歌よまぬ人も、歌よままほしいばかりに純な心持にさせられるのである。

（旅と歌と）

八秋の雨

ひさかたの空ひろらなり鴨綠の流れのはてに低き山一つ　島木赤彦

やま川のたぎちのどよみ耳底にかそけくなりて峰を越えつも　齋藤茂吉

小笹原露ほろ〳〵とこぼれ落ちて二十五菩薩秋の雨ふる　佐佐木信綱

寺々の鐘さやかにもまくらべにいたる初秋の京の朝かな　金子薫園

はる〳〵と麥の穗なびけおほやまといにしへ人を吹きし風吹く　尾上柴舟

橇の鈴戸の面にきこゆ旅なれや津輕の國の春のあけぼの　若山牧水

汽車の旅とある野中の停車場の夏草の香のなつかしかりき　石川啄木

笹の葉に積れる雪をうつくしみ口に入れつゝ箱根山越ゆ　窪田空穗

行けど〳〵玉蜀黍の穂のひかり富士あらはにも夕焼したり　前田夕暮

この峽にわれ一人なり近くにてほそ〴〵澄めるせゝらぎの音　木下利玄

船ゆ仰ぐみなとの山のちさき寺若葉の中にあさの鐘鳴る　川田順

こゝに來て心おのづからすが〴〵し富士山は白く大きく近く　石榑千亦

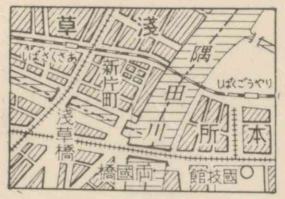
（尾の道にて）

（御殿場にて）

九　文章の道

島崎藤村

島崎藤村　名は春樹、長野縣の人、明治五年生、詩人・小説家。



隅田川通うた

一

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通うたうちに、向うの河岸まで泳ぎ越す事が出來た。更に又一夏も泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃に、よくも分らなかつた水瀬の速い遲いも分つて來たし、眞水と潮流のまじり合つたあの川の中の冷たいと溫いとも分つて來たし、水鳥の様に浮

溺

きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見る事も出來た。板子無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違無い。そして「根氣」さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違無い。

二

小諸
信越線の一驛、長野縣小諸町。

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。たゞ當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は、高慢で煩い「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私達に教へて呉れた。それからの私達の矢は、假令、的を貫くことの出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くや

焦心

裏—裡

掘—堀

葱

うになつた。これは文章の道にも當て篏めて見ることが出來る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかからねばならない。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬をかついで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗

馬鈴薯

茄子

胡瓜

サク

耕作物の根元に土を寄せかけること。

や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけて行つた。馬鈴薯の花が白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも〳〵根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く伸びて、人の脊よりも高く絡みついた畠の中には、嫩く生つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じら

肅（ふでつくり）（聿）

浅草橋　東京市神田川の下流に架した橋。

兩國橋　東京市隅田川に架した橋、日本橋區から本所區へ通ずる。

界隈

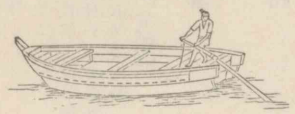
れる様になつた。私はある耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出すことが出來る。われ〳〵が文章の手本とすべきものは、何程われ〳〵の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初めである。

四

浅草の新片町に住んだ頃、家は浅草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕ぎ廻つたことがある。最初のうちは無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりも

櫓

傳馬船



ある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうにすゝまなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押すことが出來るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く樂しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。「簡素」の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とは成らない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。

（飯倉だより）

薄田泣菫　名は淳介、岡山縣の人、明治十年生、小說家・詩人。

拵　蜜柑　蜜―密　食はう　肝（肉）　腎（肉）

一〇　句讀點

薄田泣菫

文章を書くものにとつて、句讀點ほど疎かに出來ないものはない。合衆國政府は、この句讀點一つで二百萬弗損をした事がある。

何時だつたか、同國の政府が、外國產の果樹を成るべくどつさり移植して、かうした果物の供給で餘り外國に金を拵ひたくないといふので、外國產の果樹輸入は無稅にするといふ海關稅法を拵へた事があつた。バナナや蜜柑を廉く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多に無かつたが、肝腎の法文を印刷する場合に、どう違つたものか、外國產の果樹「フオリン-フルート-プラント」といふ言葉の中に句讀點が一つ挿まつて「フオリン-フルート、プラント」となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。

さあ、外國產の果物が無稅になつたといふので、蜜柑や葡萄やレモンやバナナといふやうな果物が、大手を振つてどん〳〵入つて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでに、關稅の收入がいつもよりざつと二百萬弗少なくなつてゐたさうだ。

句讀點といへば、ある時、近松門左衞門の許に、かねて昵懇の數珠屋が訪ねて來た。その折、門左は鼻先に眼鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つてゐた。

葡萄

近松門左衞門　本名は杉森信盛、號は巢林子、戲曲作者、享保九年（一七二四）歿、年七十二。

昵懇　江戸時代の眼鏡

數珠

數珠屋はそれを見ると、急にきいた風な事が言つてみたくなつた。

「何やと思うたら句讀點かいな。そないなもの、漢文には要るかも知れへんが、淨瑠璃には要らんこつちや。つまり隙潰しやな。」門左はひどく癪に障つたらしかつたが、その折は唯笑つて濟ました。

それから二三日過ぎると、數珠屋あてに手紙を一本持たせてやつた。數珠屋は封を切つてみた。手紙は數珠の注文で、なかに「ふたへにまげてくびにかけるやうなじゆず」と、いふ文句があつた。數珠屋は「二重に曲げて、首に懸けるやうな」とは隨分長い數珠を欲しがるものだと思

皺摑

つたが、早速そんなのを一つ拵へて持たせてやつた。すると門左は、注文書に違ふと言つて返して來た。

數珠屋は蟹のやうに眞赤になつて、皺くちやな注文書を摑んで門左の許に出掛けた。門左はじろりとそれを見て、

「どこにそんな事が書いてあるな。『二重に曲げ、手首に懸けるやうな』とあるぢやないか。だからさ、淨瑠璃にも句讀點が要るといふのぢやよ。」

（茶話）

勺

辨

心得ーたらーむ

或人云々

劉安世光ニ一言以テ終身之ヲ行フベキモノヲ問フ、光曰ク、ソレ誠カト、安世其ノ從ヒ入ル所ヲ問フ、曰ク、妄語セザルヨリ入ルト。（宋鑑）

司馬溫公

名は光、支那宋代の政治家・學者、西暦一〇八六年歿、年六十八。

とぞ答へける

二誠の説

一勺の水を海に入れて、海の水増したりといはむは愚なり。増さずといふも妄なり。水を加ふる所は我にして、増すと増さざるとは我にあらず。我にあらざるものは強ひて其の辨を求めずして可なり。我にある所の誠を盡くす、これ君子の道なり。誠とは虚言を言はざる事とのみ心得たらむは、愚なる事なり。或人、司馬溫公に誠に入る道を問ひければ、「妄語せざるより入る。」とぞ答へける。げに妄に語らず、虚言を言はぬより、誠の道には入るなれども、虚言を言はぬばかりを誠とは言はぬなり。

瘁く

衞の靈公

名は元、支那春秋時代に於ける衞の君、西暦前四九三年歿。

僞を言はぬに對する信は小さし。僞なきに對する誠は大なり。罌粟の子、煙草の實は至つて小さきものなり。地に落さば目にかゝらぬやうなれども、内にひとつの誠といふものありて、奪ふべからず、隠すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず。其の時到るに及んでは、芽を出し、葉を生じ、花を開き實を結ぶ。其の子を水に腐らし火に燒きて芽を出さずといふは、その子の咎ならむや。是によりて物の子を實といふ。實は卽ち誠なり。少しにても誠ならざるもの交じりて、腐りたるものは芽生ぜず、痛みたるは瘁く。人の誠も猶此の如し。

昔、衞の靈公といひし君、夜、夫人と共に坐し給ひけるに、

闕下

蘧伯玉　名は瑗、衞（支那）の賢大夫。

禮　禮記、四十九篇、五經の一、支那古代の禮書。

見ーしめーけるーに

四知　後漢（支那）の楊震の言。

いかでか……べき

遙かに車の轟く聲しけるが、闕下にして聲なく、闕下を過ぎて又鳴りけり。　靈公「誰なるべきか。」と、夫人に問ひ給ひければ、「是は蘧伯玉なるべし。　禮に『下公門式路馬』と いふことあり。『忠臣與孝子不爲昭々信節、不爲冥々惰行。』 といへり。　蘧伯玉は衞の賢人なり。　夜なればとて禮を ば廢てじ。」と、いひけり。　靈公、人を遣して見しめけるに、 果して伯玉にてぞありける。

人知るまじとて欺くは妄なり。　四知といひて、人知らずと思ひても、天知る、地知る、神知る、我知る、いかでか掩ひかくすべき。　たとへば一升の米、日々に二三十粒を取らむとも、措かむとも、知れざるべし。　然れども久しく措く

蘭

照ればこそ……麗はしけれ

筈にあふ

時は増し、取る時は減る。　草木も、朝見し色も、昨日見しも、今日見しも、さして變らぬやうなれども、誠といふものは少しも間斷なきゆゑに、いつ太るともなけれども、次第に太るものなり。

人の見ぬ間とて間斷あらば、草木も思ふまゝには伸びもすまじ。　深き谷の蘭も遙かなる山の紅葉も、人なしとてもよく薫り、美しく照ればこそ、人到りたる時も香清く色麗はしけれ。　人の到るを待ちて香を放ち、色を出さむとせば、筈にあふことあるべからず。　常々心に掛けて掃灑したらん座席と、俄に蜘蛛の絲取り、柱拭きたらむとは、いかでか見紛ふべき。　人、平生をたしなまずして、その期

誠の俄掃除
如レ見二其肺肝一 人ノ己ヲ見ルコト其ノ肺肝ヲ見ルガ如ク然リ。（大學）
なき名ぞと云々 後撰和歌集、讀人知らずの歌。
（ありぬべし あるべし）

梅園叢書 三卷、梅園の教訓書。三浦梅園―儒者、名は晉、豐後國（大分縣）の人、寛政元年（一七八九）歿、年六十七。

に臨み僞り文らむは、誠の俄掃除なるべし。「如レ見二其肺肝一」とて、人をあざむくべからず我が心をあざむくなり。

なき名ぞと人には言ひてありぬべし
心の問はばいかがこたへむ

この歌の如く、人をば欺くべけれども心に心を省みて、いかに今の如く誠ならざることをばいひしぞ、人をば欺くになどて自らの心を自ら欺けるぞと咎めたらむには自ら恥づかしくなりひとり居ても額より汗出づべし。

（梅園叢書）

山路愛山 名は彌吉、靜岡縣の人、史學者、文章家、大正六年歿、年五十四。
赤穗 兵庫縣赤穗郡、城主は淺野內匠頭長矩。
江戸城中刃傷 元祿十四年（一六〇一）三月十四日長矩は吉良義央を江戸城中で傷つけた。
早水藤左衞門 名は滿堯、四十七士の一人。
萱野三平 名は重實、討入の前自殺した。
大石良雄 通稱內藏助。
自盡
原惣右衞門 名は元辰、四十七士の一人。
大石瀨左衞門 名は信清。四十七士の一人。

一三 大石良雄

山路愛山

赤穗の城下は早駕籠の爲に大騷ぎとなりぬ。江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衞門・萱野三平は直ちに駕籠に乘りて、日に行くこと三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老大石良雄に報じたり。長矩自盡の命下るや、原惣右衞門・大石瀨左衞門は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼び出せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、しかも溫厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、茲に始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜

衆情恟々
門閥
庸愚
器局
綽
光を韜む
隱然
班
矩
恭順
城を枕にす
嗣

める彼は、衆人に驚異せられぬ。赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈、明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衞は良雄と同じく赤穗の家老にして、班は良雄の下にありしが、長矩に寵用せられ、且老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、なるべく溫和に城を明け渡さん事を主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、「先づ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を幕府に請ふべし。」と。

左祖
大垣侯
今岐阜縣大垣市、城主戸田采女正は長矩母方の從弟。
采
四月十二日
元祿十四年。（一七〇一）
籠城
行ふべからずなれり
殉死
難に投ず
警められたり

越えて二日、城中の會議はまた開かれたり。良雄は前說を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の說に左祖せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふ事の、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說を執れり。復讐の說は勝てり。血判に與る者百五十餘人、その內、江戸より來つて難に投ずる者僅に十八人。

道路は淸潔にせられたり。人民は警められたり。四

血沸く

山科
京都市東山區。

優游自適

四通八達の地
天下の視聽

上杉氏
羽前國（山形縣）米澤侯、吉良家の親戚。

諜者

月十八日、赤穂城の上より受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日、城は難なく明け渡されたり。何事かあるべしと待ち設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。

良雄は京都の山科に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を裝へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護する事

吉良氏の邸
今の本所松坂町。

采邑

婢僕

三月十四日
長矩自盡の日。

華岳寺
赤穂町大字上假屋、淺野家三代の菩提寺。

忌祭

花謝し鶯老ゆ

四條河原の夕涼
昔、京都の四條河原で祇園祭禮の日（六月七日から十二日間）行はれた納涼。

破廉恥

誹謗

恬として關り知らず

吉田兼亮
通稱忠左衞門。

一縷の望

に努め、人を遣して吉良氏の邸を守らしめ、且その采邑の人にあらざれば婢僕に用ふる事なからしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十四日は再び來りぬ。赤穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、四條河原の夕涼に都人の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知らざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。言ふ、「長廣藝州に預けられたり。」と。一縷の望は絶えぬ。この時ま

義氣金鐵の如し
弛
悔い。（悔ゆ。）
舅
石東氏　石東源五兵衞每好、但馬國（兵庫縣）豐岡城主京極甲斐守の家老。
良金　通稱主稅。

で義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣によりて君家の或は再興せられん事を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年、夏、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石東氏に託し、ひとり長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

吉良氏の防衞は尙密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで、麻布なる上杉氏の

麻布別邸　江戸麻布我善坊、今德川侯邸の一部。
刺客
餘命おぼつかなし
一死を賭す
平間　神奈川縣橘樹郡御幸村字平間。

別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。

良雄父子はたゞちに江戸に入ることを敢てせざりき。彼は先づ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を窺ひ、十一月五日に至つて漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衞、同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪

五更

横川宗利
通稱勘平。

泉岳寺
東京市芝區高輪、曹洞宗。

霏々

寂寥

鬪諍叫喚

しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何所より來つて、何所へ去るを知らず、五更に至つて他の一隊と交代せり。流石の吉良氏もこれに氣附かざりき。しかも間諜・探偵すべて功を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽ち定りぬ。

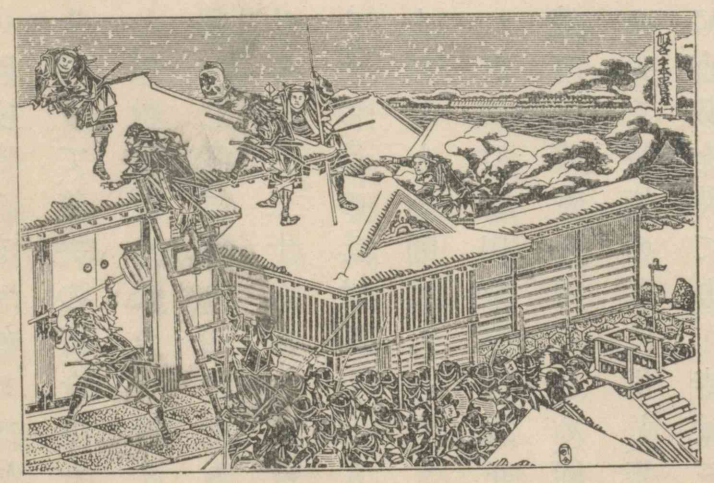
翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事裝束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞

蹂躙

清暉

忽ち聞く・・・なるを



義士討入

えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七個の人物は、吉良邸を出で去れり、時に雪晴れて、夜は全く明けたり。蹂躙せられたる邸内の積雪のみ、獨り昨夜の慘劇を物語りをれり。

清暉は輝きわたれり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは城をさして急げり。忽ち聞く、路人

喧噪 始めて知りぬ……獲たるを

風説區々
飛語紛々

富森正因 通稱助右衞門。
仙石伯耆守 但馬國（兵庫縣）出石の城主久尙。
率ゐて（率ゐる）
官裁

の喧噪なるを。始めて知りぬ、赤穗の浪士が吉良氏の邸を襲うて、義央の首を獲たるを。

風説は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲ひし者は獨り四十七人に止らず、この外尙黑裝束をなせる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏の兵は四十七人を追擊せり。いはく、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとす。と。

良雄は吉田兼亮・富森正因を大目附仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。

訣別 預けられたり良雄は……細川氏に、良金は……久松氏に

人あり言ふ、「上杉氏の衆至る。」と。良雄は同志を警めて防禦の備をなせり。而して上杉氏の衆は遂に來らざりき。

この日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川（熊本）、久松（松山）、毛利（長府）、水野（岡崎）の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜

泉岳寺の義士の墓

自裁

へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。

良雄は外溫藉にして、內に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち靜めて、騷がしき事を嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒に平和を愛する者にあらず。なすべき事は必ず成し遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と、戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

（愛山文集）

溫藉

枉

長者たる品位失墜す

有し—たり—き

主一

ストア學者

ギリシャ哲學の一派の學者。

狎

大町桂月

名は芳衞、高知縣の人、文章家、大正十四年歿、年五十七。

摸—摹

熾

一三 史傳を讀むべし

大町桂月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申し述べ候。

人は何人も摸擬性と感染性とを有し居り候。而して一生中、この二性の最も熾なるは、少年時代、若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれ

より割り出さざるべからずと存じ候。

この頃の青年の一般の缺點は、歴史、傳記の知識に乏しき事に候。隨つて今の青年は、聖人・君子・英雄・豪傑・志士・仁人・大學者・大宗教家・忠臣・孝子などに接すること極めて少く、隨つて自然、人物が小さくなり、眼界が狹くなりて、神經のみが尖り申し候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、「請ふ、大いに史傳を讀まれよ。」と。

又一つ、今の青年に通じたる缺點これあり候。それは個人的、若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考があまりに強く候。

點―点

おのれ

積善の家には云々　易經に出でたる語。

餘殃

隨つて重厚雄大の氣風なくして、こせ〳〵、ちよこちよこする小人物が多く候。これも史傳と親しまぬより起ることに候。史傳を讀まば、「積善の家には餘殃あり。」といふことがよく解り申すべく、行がおのづから重厚になり申すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

申すまでもこれ無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の有無如何にこれあり候。盛んなる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確

信致し候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存じ候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず讀誦なさるべく候。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香高く、人の心を淨化致し候へども、近時の文學物は、動もすれば人を誤るもの多ければ、その選擇には深き注意を要すべく候。

（新學生訓）

一四　年中行事の興趣

編者　鳴雪

鳴雪　内藤鳴雪、名は素行、松山市の人、俳人、大正十五年歿、年八十。

安泰

膳

元日や一系の天子不二の山

初日影うらゝかにさしのぼれば、悠久三千年、年ごとに榮えゆく大御代の新春を上下ひとしく壽ぎ祝ふ。この日畏くも宮中には四方拜の御儀が神々しく行はれる。家々では先づ氏神の大前に國運の隆昌と一家の安泰を祈り、家族打揃つて屠蘇を汲み交はし、雑煮の膳に向つて新春の喜びを交換する。注連繩を張り門松を立てた戸ごとに年賀の客の出入する頃ともなれば、大路には追羽子の音漸く繁く、古風な萬歳姿や獅子舞のちらほら見え

粥

梅一輪
嵐雪の句。

るのも春らしい。正月三日間、世は擧げてのどかな春の喜びに浸るのである。七日は七草の節供、粥に若菜を刻み入れる風習は昔ゆかしい情趣がある。松の内もいつしか過ぎて十五日になると、左義長といつて、氏神の神苑に注連飾や門松を集めて焚く風習もおもしろい。寒が明けると立春、その前夜が節分である。「福は内、鬼は外。」と、豆撒く聲が軒毎に洩れて、神詣での人々に春寒の夜が賑はふ。

二月十一日は紀元節、建國祭の催しに遠く神武建國の昔を偲び奉る。梅一輪一輪ほどのあたゝかさが訪れて、各地の梅信頻りに到る頃、初午祭がやつて來る。梅薫る

菱餅

風に稲荷大明神の小旗がはためいて、囃し立てる太鼓の音が賑やかにひゞいては、子供達の遊び心をそゝる。二月も末になれば、二寸に伸びた麥畠から雲雀が高く揚り、陽炎のもえる野面には草が萌え始める。

三月三日は雛の節供である。綺麗に飾り立てられた雛壇の下では、菱餅・白酒のかはいゝ雛の宴が開かれて、女の子にはこよない樂しい日である。六日は地久節、十日は陸軍記念日である。滿洲の野に奮戰した皇軍の義烈を偲ぶべき日である。二十一日或は二十日は彼岸の中日、各地の寺院は善男善女の佛を念ずる聲で埋まる。宮中では此の日春季皇靈祭の御儀がある。「寒さの果も彼

絢爛駘蕩

闌

岸まで」冬の寒さは全く去つて、春の暖かさが明るい陽光に乘つて訪れると、山野はこゝに全く春の裝ひ麗はしく、百花絢爛・春風駘蕩、世は正に行樂の好季となるのである。

四月三日は神武天皇祭。八日には灌佛會がある。花御堂の中におはすさゝやかな釋迦の立像に供養し奉る甘茶の匂が、少年達をお伽の國へ誘つて行く。二十九日は天長節、今日の佳き日を祝ひ奉る日の御旗が春風にはためき、津々浦々、國を擧げて寶祚の無窮を壽ぎ奉るめでたき日である。この頃になると、もう花は闌け、麥は伸びて、地の上はみづ〳〵しい新綠の色に包まれる。五月五日は端午の節句である。大空を我が物顏に泳ぐ鯉幟、薫

粽

風にはた〳〵と鳴る幟旗、軒毎に菖蒲を葺き、家々に武者人形を飾り、柏餅や粽に祖先の勇武を偲ぶ。男の子にはうれしい一日である。

二十七日は海軍記念日、日本海々戰の壯烈な物語に小國民の胸はをどる。

咲くだけの花が咲いては散つて、目に青葉若葉の六月に入る。その十二日頃からは梅雨期である。鬱陶しい雨の日が毎日續いて稻田には水が溢れ、蛙の聲がやかましくなると、農家はもうそれ田植、それ養蠶と日の廻るほどいそがしい。梅雨晴の強い日ざしが眼を射るとまもなく暑さが增して、水の邊がなつかしまれる。そろ〳〵

苧殻

金魚賣の聲が町に聞えだす。七月七日は七夕祭、色紙や短冊を結びつけた青竹の夜空指す彼方に仰ぐ天の河の物語に、夕方の時の移るのを忘れるのも昔ゆかしい行事である。十五日は盆の精靈祭、魂棚に初なりの野の物や果物を手向けて故人の靈を慰める。門ごとに苧殻焚く送り火のはかない光も物あはれである。村の人達が盆踊の歌囃子に夜の更けるも忘れて踊り狂ふのはこの頃である。やがて學校は休暇に入つて、旅行に、登山に、水泳に、潑剌たる身心を養ふべき學生にとつてはうれしい日がつゞく。日中の炎威正に烈しく、行水に一日の汗を流して綠蔭深きところに風を納れるもよく、浴衣輕く河の

趁

賞翫

ほとりの螢狩に涼を趁ふもよい時節である。秋立つとはいへ九月はまだ殘暑がきびしい。雲のたゝずまひも何となくあわたゞしく颱風の季節が近づく。二百十日は農家の厄日である。暴風一過、美田空しく荒れて、丹誠の作物が根こそぎ臺無しになつてしまふやうなこともある。秋涼漸く深く、夜ごとにすだく蟲の音が涼味を添へて、秋晴の空澄む頃には陰曆八月十五夜の月見が來る。中空にかゝる團々たる明月に芒を手向けて、團子や新芋を供へ、夜の更けるまで明光を賞翫する興趣も捨てがたい。二十三日或は二十四日は秋季皇靈祭の日。秋の彼岸といつて老若寺參りするのもこの日である。陰曆九

夕餉

月九日は重陽の節供、昔は菊酒を汲んで齢を延ぶと祝つたものである。後の月と稱してさえゆく月光を賞翫するのはその十三夜で、俗に豆名月ともいつてゐる。此の頃は前後秋意もいよ〳〵濃やかに、一時雨ごとに山の木の葉が色づき、茸の香が夕餉の膳にかをり、秋の木の實が店頭に出盛る。都の人が茸狩や紅葉狩に山への行樂に秋の一日々々が消されていく時分には、稻田がすつかり黄金色に染められて、農家にとつては、樂しくもまた忙しい收穫の時節となる。

十月十五日の御會式が濟むと、十七日は神嘗祭。

十一月三日は明治節である。秋空高く澄みわたり、菊

酉の市

花馥郁として薫る佳き日に、明治大帝の御偉績を偲び奉るは畏くもまことにふさはしい。明治神宮外苑にスポーツ日本の精華を競ふ運動競技大會の催されるのも此の頃である。熊手に緣起を祝ふ酉の市が開かれて、大鳥神社の境内が賑はふのも此の月である。二十三日は新嘗祭。野分が吹いて落葉が庭を埋め盡くすと霜が下りる。霰から霙になり、小雪のちらつく日が幾日かつゞいて師走に入る。スキー・スケートに氷雪を樂しむ季節であり、年の暮の忙しい時節でもある。町々には歳の市が立つ。歳暮大賣出の廣告幟が賑はしく、店頭の電飾が夜更くるまで晃々として、街は著ぶくれた暮の買物客の慌

餅搗

虚子

高濱虚子、松山市の人、明治七年生、俳人。

しい足どりに滿たされる。間もなく二十五日の大正天皇祭が來る。此の日はまたクリスマスの當日でもある。サンタクローズの訪れを待つ子供達の心もいぢらしい。

家々は煤拂ひに、餅搗に、賀狀書きに、迎年の準備に、日もこれ足らぬほど忙しい。正月の用意を滯りなく濟ませ、年内の業務もすべて爲し終へ、ほつとした身を爐邊によせて、家族一同と一年の追憶に耽る折しも大晦日の除夜の鐘が靜かに響いてくる。かくて事多かりし一年は逝き、人々は再び希望多き新年を迎へるのである。

歳晩の二日になりて事多し　虚子

吉田絃二郎

名は源二郎、佐賀縣の人、明治十九年生、小説家、早稲田大學講師。

屋島

香川縣高松市の東方。

屋島寺

屋島にある、眞言宗。

重盛

平重盛、清盛の子。

景清

平氏の臣、惡七兵衛と呼ばる。

一五　朝の海

吉田絃二郎

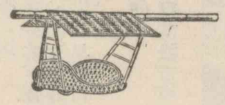
松風の音であらう。遠い時雨を思はせる程に微な夜明けの風が、屋島の浦々から峰へ〳〵と吹きあげて來るらしい。時としては浦波の如く、時としては遠ざかり行く沖の大波の如く、窓近く訪れては、はたと跡絶えてしまふ。

ぢつと眼をつぶつて松風の音を聽いてゐると、昨日屋島寺の薄暗い御堂の中で觀た重盛の燈籠や、景清念持佛の尊い御像や、何彼と浮かんで來るのであつた。潮に濡れた鎧に美しく描き出された秋草の、さながらに色もあ

せず見出さるるのも、昔を思うてあはれであつた。昨日屋島寺を出る時、暮れゆく鐘楼の下に立つて見送つてくれた僧の姿までが、とほい昔の人のやうにおもはれた。

私は窓のカーテンを開けた。高松の町は靄に包まれてゐた。夜はなほ高松の町を廻る裾山にたゆたうてゐた。高松城の櫓が、汀に沿うて夜明け方の微な白い光を漂はせてゐた。燈臺の火もまたゝいてゐた。

山駕籠に心地よく搖られながら、松林の間を走る。枯れ枯れな冬草の間に、野菊の可憐な姿を見出す。一本一本磨きあげられたやうな屋島の赤松の間を、大槌・小槌・豐



山駕籠

たゆたふ

崇德天皇
第七十五代。

白峰陵
香川縣綾歌郡松山村白峰にある崇德天皇の御陵。

嶺
小豆島
香川縣の東北にある島。

燭
航海を終へて
航海が終つて
和やか

島・女木・男木の島影が走る。

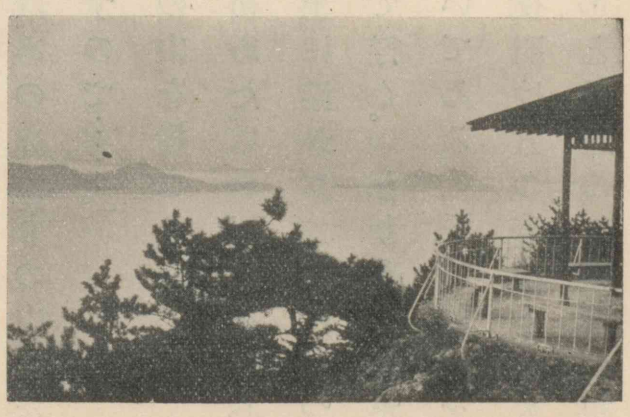
「崇德天皇の白峰陵といふのは、あのあたりの山になりますが、まだ霧がかけてをりますので……。」

と、駕籠の男たちは、高松の右手の山を指さした。

北嶺に達した頃、小鳥が鳴き初めた。小豆島を中心に、瀨戸内海の無數の島々が波の上に浮かぶ。海は煙つてゐる。海は溶けて朝霧に消えて行く。とり殘された燈臺の燭が、薄暗い島影にまたゝいてゐる。長い航海を終へて歸り行く汽船であらう。夜明け方の海は、いとも和やかに、幸福なる汽船を東へ〳〵と見送る。相迎へ相去る、一つ〳〵の小島に、朝の祝福を投げつゝ船は行く。

船は、思ひ〳〵の旅人の心を載せて、朝の海を辷つては島影を縫ふ。海は、明け方の空を映して、五月の山よりも青く、空よりも廣い。

「阿波の鳴門がこの見當でせう。これが須磨。明石……。このあたりに雪に包まれた大山が見える筈ですが。」私は振りかへつて見た。其處にも見知らぬ二人づれの旅人が、朝の海を越えて、中國あたりの山



屋島の展望

阿波の鳴門
徳島縣の東北端なる孫崎と兵庫縣淡路島の西南端なる鳴門崎との間なる海峽。

須磨
神戸市須磨區、瀬戸内海に面する。

明石
明石市、瀬戸内海に面し須磨の西に在り。

越え。（越ゆ。）

を眺めてゐた。私たちは、屋島の嶺に上つて海に面する方へ出た。

「この岬の陰が、船隠といつて、平家が兵船を隠して置いたところださうです。梶原が攻め寄せて來たのは、こゝなんです。」

「那須與一の扇の的が、あの岸のところですよ。」

やゝ波が高くなつて來た。

私は、昨日、日の暮るる頃、佐藤嗣信の墓に詣でたことを思ひ出した。朝霧の中に洲崎寺、嗣信の墓のあたり、或は總門の跡を眺めながら、船は壇の浦の汀へ近く走る。波は立ちに立ちて旅人の心をぬらす。

梶原
梶原景時、源頼朝の臣。

那須與一
源義經の臣。

佐藤嗣信
源義經の臣。

壇の浦
香川縣屋島の東方。

知盛　清盛の子。

菊王丸　能登守教經の侍童。

鞆町　廣島縣沼隈郡、福山市の南に當り瀬戸内海に面する。

宿縁

住みなれし都のかたはよそながら
　　袖に波越す磯の松島

新中納言知盛の歌を想ひ出す。私は昨日、日が暮れて遂に菊王丸の墓を訪ねなかつたことを名殘惜しく思つてゐた。

今日は、波さへ無ければ瀬戸内海を横切つて、鞆町に出て、京都へ歸る積りであつたが、波が高いために船をやることが出來ない。自然、船を屋島の岸に繫いで、再び壇の浦邊を訪ねることになつた。菊王丸の墓に詣ることの出來たのも、何かの宿縁であらう。鹽を燒く小屋のあたりを廻り、やがて港に沿うて走つてくる村の童たちに、菊

能登殿　平教經、教盛の子。

平家物語　十二卷、著者不明、別に灌頂卷と劒卷とがある、平治物語の後を承けて、二十餘年間の治亂を錄した軍記物語。

萌　腹卷

王丸の墓をたづねた。

「菊王丸さんの墓なら知つてゐるよ。」

童たちは先に立つて、枯草の中を七八丁も飛んで行つた。

埃の多い道から二三間離れたばかりのところに、蔭深い木立の下に、石を積みあげた塚がある。其の塚の後に、苔蒸したさゝやかな塔婆がある。菊王丸の墓である。

「生年十八歳にぞ成りにける。能登殿、この童を討たせて、餘りに哀れに思はれければ、その後は軍をもし給はず、云云。」荒れ果てた路傍の塚の前に佇んでゐると、平家物語の記事がさながらに浮かんで來る。萌葱匂の腹卷を著、草摺のはづれを射貫かれて、船中に運ばれてゐるけなげ

な若武者の姿が映つて來る。

案内してくれた濱の子供たちは、菊王丸の墓をおほふやうに繁つてゐる、まゆみの眞つ紅な實をもぎとつては、無心にその數をかぞへてゐた。

靜かな朝の潮を隔てて、源平の若武者たちの墓は、霧に包まれて眠つてゐた。海は、微な松風の音を、旅人の耳に殘して輝き始めた。鳴きつれてゆく千鳥の跡を、ぢつと見送つてゐれば、旅人の心はさすがに沈む。

「大きな汽船だ。」菊王丸の墓のまゆみの實を弄んでゐた子供たちは、濱に立つて叫ぶ。

瀬戸内海を西航する汽船が、沖の小島をかすめてゆく。

（煙れる田園）

知足の理

不肖者

一六 清福

我が身の足ることを知りて、分に安んずる人まれなり。多くは分外を願ふによりて樂しみを失へり。知足の理をよく思ひて、常に忘るべからず。足ることを知れば、貧賤にしても樂しむ。足ることを知らざれば、富貴を極むれども猶ほあきたらずして樂しまず。かくて富貴ならむは、貧賤なる人の足ることを知れるには遙かに劣れり。富貴貧賤は賢愚によらず、唯だ生まれつきたる分あり。賢者も貧しく、不肖者も富める人多し。これ生まれつきたる分なり。分に安んじて、分外を羨み願ふべからず。

外を願ふ人は樂しみなくして憂多し。禍も亦これよりおこる。愚なりと云ふべし。世には福われ程もなき人多し。われよりも下なる人を見て、足ることを知り、分に安んじ、外を願はざれば憂なく、樂しみ多くして禍なし。又極めて貧しき人も、人各生まれつきたる分あることを知りて、分に安んじて、天をうらみ人をとがむべからず。

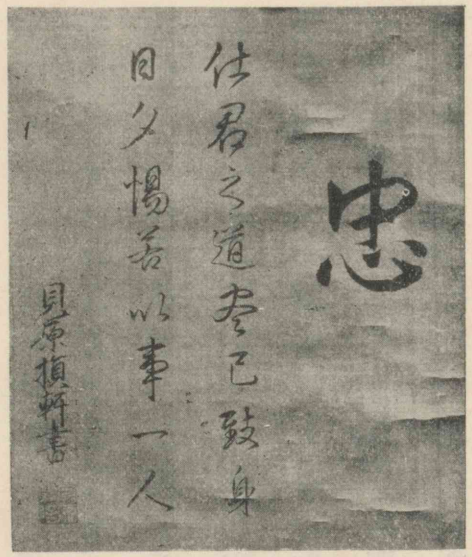
貝原益軒

富貴なればおごり易くして、此の樂しみを得がたし。貧賤の人は怠すくなくしてさとし易し。富貴の人は世

貝原益軒筆

忠

仕君之道盡己致身
日夕惕若以事一人
貝原損軒書



貝原益軒筆

のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂しむことを知らず。然れば富貴なるはかへつて不幸といふべし。此の大いなる樂しみを得難ければなり。古語に貧しきは富めるにまされりといひ、又讀書は貧者の樂しみといへるもむべなり。わがともがら愚にして又いやしければ、塵ひぢの數にもあらぬ身なれど、書を讀み道をたふとぶ樂しみは、いかなる富貴にもかへ難し。

清福といふ事あり。樂しみを好める人必ずこれを知るべし。これ識者の樂しむ所にして、俗人は知らず。此の故に我が身に清福を得て大いなる幸あれども、これを知りて樂しめる人まれなり。たとへば寶の山に入りても、寶を知らざれば手を空しくして歸るが如し。清福は富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其身安く靜かにして心に憂のなき、これなむ清福とぞいふめる。いとまありて閑かに書を讀み古の道を樂しむは、これ清福のいと大いなる樂しみなり。また其の心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはるゝ

驕樂　これなむ清福とぞいふめる

風雅

榮えうるはしきを見て樂しみ、貧しけれど飢寒の憂なく、蔬食口に馴れぬれば味はひありて、肥濃なる美味を羨まず、淡薄なるはかへつて身を養ふに宜し。布の衣、紙の衾、いさゝか寒さを防ぐに足れり。葎生ひてあれたる宿に起き臥しても、風雨のうれへなかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさしばさまば、貧とすべからず。これ眞の寶なれば滿籯の金にまされり。また良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。これ皆清福を得たるなり。いかなる緣ありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて幸甚し。

（樂訓）

飢寒
蔬食　馴れぬれば　馴るれば
衾

滿籯
文法　安んず　忘る　極む　榮ゆ　得　いやし　樂し　宜し

樂訓　貝原益軒の著、益軒十訓の一。貝原益軒一名は篤信、筑前國（福岡縣）の人、江戸時代の學者、正德四年（一七一四）歿、年八十五。

村井弦齋
名は寛、愛知縣の人、小説家、昭和二年歿、年六十五。

拂はしまし

凜冽

蕭條

湖上
琵琶湖。

辛崎の松
近江八景の一。

堅田
堅田の落雁、近江八景の一、

白皚々

比良の雪
比良の暮雪、近江八景の一。

一七　雪のわかれ

村井弦齋

「雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の滋賀の山越。」それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凜冽たる風は膚を裂く。　辛苦の内に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。　辛崎の松は暮靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。　見渡せば、白皚々たる比良の雪、今より此の山路に掛らば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨

我が故郷
滋賀縣高島郡小川村。

山路へこそは掛りけれ

藤太郎
中江藤樹の幼名。中江藤樹―名は原、江戸時代の儒學者、近江聖人と稱せらる、慶安元年(一六四八)歿、年四十一。

んで暫く湖畔に立ちたりしが、やゝありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に著くなるに、何とて空しく此所に留らん、夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ、いで〳〵心を取直し、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。　痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿り辿りて行く道の、岩に躓き、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中を登り行く。　軈て日は暮れたり。　闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて手も足

閉ぢ（閉ざ）

も凍るばかり。一山寂莫として、耳に答ふる者とては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉をならす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽に物凄く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へん樣なし。斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅馴れぬ身

雪中の藤太郎

出でられず

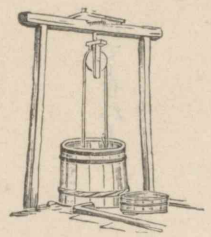
饑

の悲しさ、足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。少年は進退谷まりて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、少時降る雪をうらめしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に沁み渡り、眠るとも無く死ぬとも無く、暫時は前後も知らずなりにけり。

懷かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川・草木を眼の前に見て、忽ち足の疲れ打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道々の家は未だ多く起き出でず。彼の家は我が友

衡門

俯竹



車井

の家なりけり、此の家にはわれに優しき老人有りきなどと、昔の事を想ひ出でて、そゞろに哀れを催しつゝ、須臾にして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて復昔日の觀に非ず。柱も傾ける處あり、築地も崩れたる處あり。前庭の古松、刈る人無ければ枝繁れり。俯竹一叢思ふまゝに根を延して、彼方此方に生え出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確に母人なり。少年は忽

縋

立たーしめーさらーん

ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事無き母様が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情無しと、湧き出づる涙禁めあへず。急ぎ車井の側に駈け行きて、後ろより其の袂を引き、「母様、私が汲みませう。」と、涙ながらに取縋る。

事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰か、藤太郎、如何して此處へ。」藤太郎は細き聲、「はい、母様の御手助を致しに參りました。先づ内へおはひり遊ばせ、お頭髪へ雪が掛ります。」と、孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りし儘石の如く立てり。「祖父様とでも御一緒か。」「いえ、一人で御座います。」

母は聲を勵まし、「祖父様が一人和郎をお出しなされたか。」

「いえ、祖父様には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ、

「怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、和郎が

歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は滅

多に家へは入れません。」颯と吹き來る朝嵐に、地上の雪

はくる〳〵と捲き揚げられて、横に二人の顏を撲つ。

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子の優し

き心根にすゞろに涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、態と

言葉をはげまして、「和郎は此の母の言葉を忘れましたか。

和郎を祖父様に賴む時、一旦國を出たからは、天晴立派な

人にならない内は、決して中途で歸るなと、あれ程堅く言

跪

大洲 愛媛縣喜多郡大洲町。

ひ聞かせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶの

も、唯和郎を立派な者にしたいばかり。立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助を仕てくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。」

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、斯く迄我が身を思うて來たりしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせん

千仞の谷
沾
絞
咬
屹

かと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「和郎は母の言ふ事が解りませんか。」と、強くは叱れど聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ頭を垂れしまゝ、微なる聲にて、「はい、解りました。」「それならば今からかへりますか。」藤太郎は悲しき聲、「はい、歸ります。」と、素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らるる思。遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を呑む。

藤太郎は屹としてたち上れり。「母様、此の藥は皺の妙藥で、世にも得難き品、これ差上げたいと態々持つて參りました物。これだけはお取りなされて下され。」と、新谷にて得し妙藥を差出す。母は快く「和郎の志、これだけは受けませう。」と、手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。

母は恥づかしと、ぢつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心をはげまして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。

まいせう
文法
けり
じたる
らし
たり
なり

一八　銀盤に躍る

木原　均

年を追うて冬を待ち侘びる人々の多くなつたことは喜ばしい。早春消えゆく雪を恨めしいと歎ずる人々のあることは嬉しい限りである。

何故に吾々は過去において、冬を暗黒な世界として嫌悪しないまでも喜ばなかつたか。これはすべて吾々の南國式の生活様式と、ウインター＝スポーツの缺如とによると考へてよからう。ところがスケートが行はれ、スキーが試みられるやうになつて、從來の消極的な冬の生活様式の殻をうち破つて、冬の寒さを利用し、冬にのみ惠ま

木原　均
東京府の人、明治二十六年生、理學博士、京都帝國大學教授。

恨

消極的―積極的

（近附屋小泉冷岳撮影）

サン＝モリッツ
アルプス山脈中の一峯。

恣

樵夫

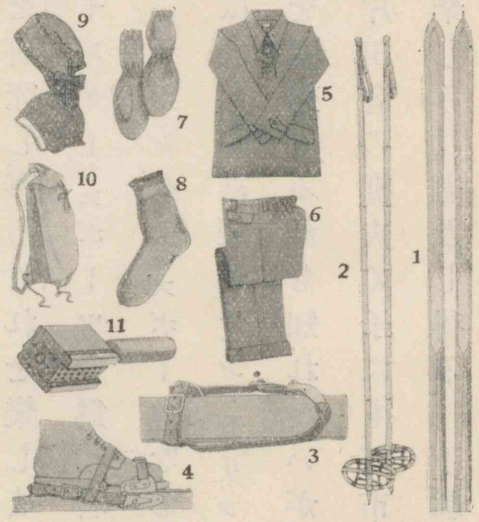
陋屋

れる雪と氷とを利用する人々が多くなつたことを禮讃したい。彼等は寒さに對して逃げ足を踏まない。これを研究し、寧ろこれを樂しまうとしてゐる。彼等とはウインター＝スポーツを爲す者のことである。

ウインター＝スポーツなる言葉を使用すると、ある人々は直ちに富豪がサン＝モリッツあたりで恣に享樂する事を聯想するかも知れないが、それはその極端な例である。片田舍の樵夫の子にも、都市の陋屋に住む小僧にもこの樂しみは普及し得る。下駄の底に打ちつけた古鐵片でも、スケートの味が味はれるし、草鞋にくゝりつけた木片でも、スキーの味に醉ふことが出來る。また小さな塵

スキーの道具

1 スキー
2 柄
3 締具
4 靴
5 上衣
6 ズボン
7 手袋
8 靴下
9 帽子
10 リュックサック
11 バラー



スキーの道具

取に乘つて、橇の痛快味を味はふ子供等さへもある。

スキー禮讚者は、スキーの形がすでに美しいといふ。先端の曲り工合などは特に美しい。スキーの出來ない夏の盛りでも、時々スキーを取出しては愛撫する人々も決して少くはない。スキーは木片ではあるが、藝術品である。スキーに使はれてをる附屬具といへども、決してスキーに負けてはゐない。雪輪のついたステツキ、

鋲　滑

鋲の打つてある重々しい靴、明るい色の襟卷やバンド、これらは何れも冬を明るくしようがための努力に外ならないであらうが、それも嬉しい事の一つである。

併し、スキーが何よりも優つてゐる——ある人をして、人生最大の快事といはしめるのは、雪に掩はれた山野を、或は六十哩の速力で滑降し、或は又沈默の森に逍遙し、又ある時は氷原の境に達し得るからではなからうか。勿論その技には巧拙はあるが、雪の上で轉がり通すことも矢張り痛快なのである。ある人が、「往來で轉ぶと、顏をしかめて後をも見ずにこそ〳〵と走つてゆくが、スキーでこそ天眞爛漫に笑つてをられる。」と言ふ意味の話をした

ツール
旅又は漫遊。

エスカレーター
自働式の階段。

事がある。滑り得て面白く、轉んでも亦面白いのである。

こゝで想ひ起すのは、スキー場といふ言葉である。スキー場とは或限られた範圍の斜面の事で、そこを上下して滑るのが、スキーの本領であるかのやうな考を持つ事を意味する。之は是非とも打破したいものである。「スキーは吾々が冬の自然の懷に入る唯一の道案内であつて、甲地から乙地に行くツールをなすべきものである。」と、ノルウェーのヘルセット中尉は繰返して說いてをる。

誰もエレベーターで大なる速力を出して下らうが、それに快感は感じまい。然しスキーのジャンプにはこれがある。誰もエスカレーターに乘つて階下に下りたと

いつて、痛快なりとはしまい。然しスキーで斜面を滑る時にはそれが味はれる。それは不安定さに打勝つがためである。子供等にとつては、滑り臺からの直滑降は冒險であつて、その成功は彼等を滿足せしめるに違ひないが、少し大きい少年には不滿足である。彼等にはもはやそれは冒險でないからである。スキーは從つて、その安定な半面に無上の快感が宿つてゐるのである。終日の疲勞も一回の直滑降で癒されるのはこれがためである。轉倒することが全然なかつたならば、それこそスキーはつまらないものではなからうか。

スキーは以上のやうに冬の自然を樂しむばかりでは

顏貌

ない。冬の自然を細かに觀察させ、これに親しませ、多少なりとも雪と氷との知識を吾々に與へる。試みに眞冬の高山の頂に立つて見る時は、その怪奇なる雪面の諸相に驚嘆するであらう。これらが風の方向または日射の方向强弱によつて、刻々にその顏貌を變へることも、スキーマンに驚異の眼をみはらせるに十分であらう。

終りに競技のスキーについて一言を費しておきたい。スキーの競技は、ジャンプと長距離競走とであるが、興味の中心をなすものは何と言つてもジャンプである。實にジャンプ競技はスケートのアイスホッケーと並んで、冬の競技の王位を占むべきものであらう。

ジャンプには、美・大膽・安定の三條件が要求されてゐる。四十米以上のジャンプになると、人間技でないと思へるくらゐである。あの恐しい速力で、深く落ちてゆきながら、それでも少しも平衡を失はずに飛んでゆく姿を見て、私は人間の尊ぶべき存在であることに、强く打たれたことが度々であつた。そのくらゐジャンプは吾々をして襟を正さしめるところがある。ジャンプは實にスキー競技中の花であるばかりでなく、あらゆる競技の中で、最も勇敢壯快なものである。

長距離競走は見物する點からいへば、餘り面白味のあるものではない。が、山を越え、谷を渡り、雪野原を遠く横

炬燵

ぎつて、十五キロ乃至十八キロを走り通すことは、技術と忍耐力とを併せ有する者でなくては出來ない。　まして耐久競走といつて、四十キロ乃至六十キロの競走に至つては猶更のことである。　こゝに吾々は、鈍重ではあるが粘り強い北國人の性格を見るのである。

冬の世界は近づいた。　炬燵の中から、部屋のガラス戸から觀賞する銀世界ではなく、吾々の突入し活躍する舞臺となるべき雪の世界が近づいた。　青く澄んだ空と輝いた太陽との下で、雪と氷の上で、冬を樂しむ人々の上に幸あれ。

（東京朝日新聞に據る）

蜃樓

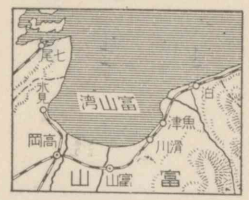
城郭

一九　蜃氣樓

唐土（もろこし）の詩文にも多く作りて、もてはやせる蜃樓といふことあり。　又海市ともいふ。　海上に雲の如くに氣立ちのぼりて、樓臺、城郭の形をあらはし、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。　唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて、空中に樓閣の形をあらはすなりと。　又蜃といふは、其の形龍のごときものにして、海中に住んで、氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。　色々の說あり。　蘇東坡なども南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。　唐土にて

……ことぞ、

魚津　越中國（富山縣）下新川郡。



歷々然

社人

は甚だ珍らしがりて賞玩することとぞ。

我が國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此の蜃氣樓は甚だ稀なり。只越中の魚津といふ處に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り海上霞みわたりて、一面の鏡の打曇れるがごとき日に、此の蜃氣樓をむすぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶ事あり。誠に唐土の人のいへる如く、海上に煙のごとく雲のごとく、次第にむすび來りて、遂には樓臺のごとく、或は城郭の如く、人馬往來せる如きも、歷々然として見ゆ。北地に我が親しく交りし宮島式部太夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は

矢倉

天の橋立　丹後國（京都府）與謝郡、日本三景の一。

富山　今の富山市。

消え。（消ゆ。）

逗留

幕を引けるがごとくなりしが、暫く見る間に、城郭の如く、矢倉・高塀やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうに見えぬ。夕暮に及び風すこし出でたれば、漸に消え失せて、痕形もなくなりしとなり。富山よりは纔に六里隔てたる處なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶかもしれ難く、又結びたる時、急に人して告げしらすとも、其の間には消え失せて見るべからず。此の故に魚津近處の海邊の人は、例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯つひに見ざる人多し。

余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して、

絲魚川　越後國（新潟縣）西頸城郡。

臨望

蜃樓を見るべしと人々に勸められ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし比は正月・二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せむことあまり永々しければ、殘念なりしかども見ずして越後にこえたり。越後の絲魚川（いといがは）にて、松山茂叔（もしゅく）に此のことを語りしに、此の人も絲魚川の海中遙かに山の出で來るを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて、折々見ることなりといひしと語られき。余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大洋にある事にて、陸地近き入海にはなき事のやうに心得しが、魚津の地理を見るにさにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向うの方七八里と思ふ程に、能登

能登國　今石川縣、能登半島。

桑名　伊勢國（三重縣）桑名郡。

安藝國　今の廣島縣。

東遊記　「西遊記」と併せて二十卷、橘南蹊の紀行集。橘南蹊―名は春暉、江戸時代の醫者、文章家、文化二年（一八〇五）歿、年五十四。

國の山を屏風のごとくに見る魚津の海は、東よりの入海なり。海中より蒸し登る陽氣、向うの山に映じて色々の形を見するなり。向うに當（あて）なく、數百千里見はらしたる大海にては、陽氣のぼるといへども、向うの當無ければ映ずることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ。伊勢の桑名の海にも三十年・五十年の内には、たま〳〵蜃樓を結ぶ事ありといふ。これも向うに尾張・三河の山を受けてあるゆゑなるべし。また安藝國にても、たま〳〵はありといふ。これも向うに山あり。その外の國にては、蜃樓をむすぶ事いまだ聞かず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべきことなり。（東遊記）

相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、小説家。

はこべ

地しばり

ふきのたう

二〇 雪國の春

相馬御風

一時は一丈餘りもあつた雪がいつの間にか消えて、七十餘日目で私達は庭の黒土を踏むことが出來た。そこにはもう黄水仙のみづ〳〵しい色の芽が二寸ほども伸びてゐた。芍藥の赤い芽も一寸以上伸びてゐた。はこべや地しばりなどの雜草はいつしかすつかり起き直つて春の陽を吸つてゐた。庭隅にぽこ〳〵頭を並べてゐたふきのたうは僅か二三日のうちにほぐれて花をのぞかせてゐた。どんなに深く積つた雪でも、不思議と地面との間が一寸も二寸も隙いてゐるもので、草々の芽はその間隙に春を待ちつゝ顔をのぞかせてゐたのだ。

雪の底に壓し伏せられてゐた庭のかへでも、雪の消えた當座は壓し伏せられたまゝの形でゐたが、この四五日の天氣つゞきですつかり起き直つて、枝といふ枝は日に日に大空の方へ太陽の方へと伸び上りつゝある。そしておのづから彼等の枝ぶりをなほし、全體の容姿をとゝのへつゝある。いふまでもなくそれは植木屋によつてつくられた元の容姿や枝ぶりとはちがふ。

しかし自然にとゝのつた樹木の容姿には、植木屋なぞの企て及ばない別趣の妙味がある。

潮風の荒い海岸の松の木や、雪の深く積る山地の樹木

などに、私達は植木屋なんかの苦心慘憺してつくつた庭木や盆栽などよりも、遙かに風情に富んだ容姿を見ることが少くないが、さうした天然の樹木の美しい容姿を見るたびに、私はそこに幾十春秋風雪と闘ひ、寒暑と闘ひ來つた彼等の雄々しさを感ずるのである。たゝかれ、曲げられ、折られ、壓し伏せられつゝも、彼等は雨の情、日光の恩惠を力に、いつしか自らの姿をとゝのへて來たのである。自然は一方に彼等に對して暴虐な敵であるが、他方にそれは溫かな慈母の胸である。山上に立つ老木の姿は、自然の暴虐に對する雄々しき闘ひによつて傷つきつゝも、生きぬいて來た勇者の姿であると共に、それは溫かな慈

母の胸に抱かれて、あらゆる惱み、あらゆる痛みから救はれた愛さるる者の和やかな姿である。

折られたり、ゆがめられたり、矯められたり、伏せられたりした彼等の部分々々には、風雪とのいたましい闘ひの名殘は見えるが、それらを和らげとゝのへ、調和あらしめてゐる全體の容姿には、慈母の如き自然の愛が象徴されてゐる。

私は永い冬の惰性から兎角まだ離れ得ないでゐる茶の間の爐邊に坐つて、日に〳〵姿をとゝのへて行く雪折れのひどい庭木を眺めながら、今更の如く一方に生命の力の強さを感ずると共に、他方にそれをいたはり力づけ

つゝある春の惠の大きさに驚いてゐる。

畑には地面にへばりついたやうに雪に壓されてゐた麥が、日一日と起き上り、伸び立ちつゝある。秋のうちに芽を出してゐたえん豆の苗も、やがては卷蔓の手を伸しはじめるだらう。雪國では麥踏みといふことをする必要はないが、南國ではわざ〳〵麥を人間の足で踏みつけるといふ。麥のやうに壓迫されるほど成長の良いもののあるといふことは何としても面白い。

雪國の春の地面は、壓しつぶされてゐた草木の新な起き上りと、成長との活舞臺である。永い間地上をおほうてゐた雪が消え、ほの〴〵と春の世界が展開されると、人

人はいつとなしに永い陰鬱な冬をすごして來たことなんかけろりと忘れてしまふ。そしてひたすら春の歡びに浮かれる。

「永い間あんなに深い雪の中にゐたんだけれど、何だか今になつて見ると夢のやうですね。」「いかにも、つい十日ほど前まで雪の上ばかり歩いてゐたんですが、それすら遠い昔のことのやうな氣がするぢやありませんか。」

春光

飴

こんな風に私達はすつかりもう冬を忘れてしまつてゐる。これはひとり人間ばかりでなく、もつともひどく雪と暴風と寒さとにいぢめられてゐた木や草でさへも、いつそんな苦難に逢つたかといはぬばかりの朗かな様子で、春の陽を吸うてゐる。

冬中餌に困つてゐた雀どもまでが、少しのやつれも見せずに遊びまはつてゐる。

あのいかにも春を呼ぶやうな種賣の聲はまだ聞えないが、それも四月半ば近くになれば毎日のやうに聞かれるであらう。それにつゞいて金魚賣がやつて來る。飴屋がやつて來る。よく町と村とをつなぐ畦道なんかで、

小さなガラス鉢に四五匹の金魚を泳がしたのを、いかにも大切さうに手に提げて五歩に一度、十歩に一度のぞいて見ながら、町から村へと歸つて行く子供達を春の夕暮に見受けるが、それは何ともいひやうなくいぢらしいものである。

毎年四月の月の半ば以上、まだ雪の中で暮さなければならぬ山の村もあり、雪を掘りのけて苗代田をつくらねばならぬ村も少からずある。二尺も三尺も雪のつもつた廣場に舞臺をかけて若い衆が素人芝居を演じ、見物人は雪の上にわらむしろを敷いただけの座席に坐つて、終日寒さも何も忘れて打興ずるといふ山の中の村もある。

崖

越後の春は何といつても晩い。空はすつかり春になつても、地上の雪はなか〳〵消えつくさない、雪の比較的早く消える地方でも、すぐそこまで眞白な雪の山を眺めながら、田をすき、苗を植ゑなければならぬやうなところが多い。

櫻も桃も四月下旬でなければ咲かない。蒲公英の花盛りも四月の末から五月にかけてである。

「先生、花とつて來ました。」と叫んで、さも自慢さうに山の子供達が、村の學校の先生のところに第一に持つて來てくれる花は、片栗の花だといふ。山道ばたの崖の日あたりのいゝあたりに、逸早くところ〴〵土が現れると、そこにまづ咲く花はあのゆかしい紫のかたこ花であらう。見渡すかぎりまだ雪におほはれてゐる中に、こどもたちが思ひがけなくこの花の咲いてゐるのを見つけた時の喜びのほども思ひやられる。

山の子供達が一刻も早く黑い地面を踏みたさに、わざわざ海岸に近い村や町に遙々出て來るといふ氣持も、毎年のことながら私はなつかしく思ふ。町では雪が消えたと聞くと、子供達は一里や二里の雪道を薪を背負はされて歩くぐらゐの苦勞は忍んでも、地面を踏む歡びを得たいばかりに出て來るのであらう。季節の推移に對しては子供がもつとも敏感である。

（砂に坐して語る）

高山樗牛
名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝評論家、明治三十五年歿、年三十二。

（なりし なりき）
名にし負ふ
こちふく風
苫屋
かをり
をかし
のどかなりや
相模
神奈川縣に屬する。
安房
千葉縣に屬する。

三　我が袖の記

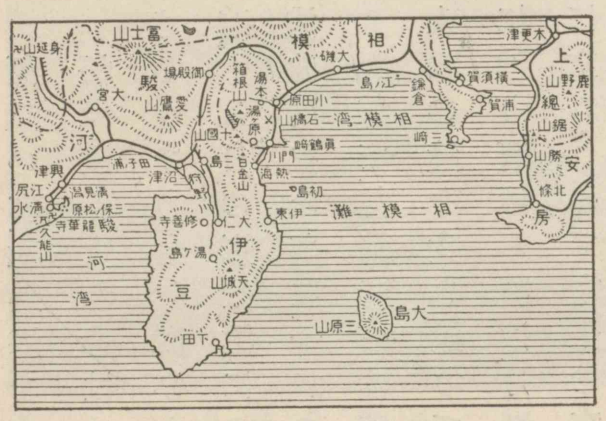
高山樗牛

一　熱海の冬

熱海のふた月は、まことに樂しきあはれ深き冬の暮しなりし。よそならば吹雪にとぢられて、日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。むつきはじめの梅が香は、はやくも春を告げそめて、野邊のやけあとの綠なすは、人の心もときめくころか。苫屋どもに岩海苔のかをりせるもをかしく、蘆の屋に心細く立ちのぼる煙ものどかなりや。

海原遠く見渡せば、相模・安房の山々、雲か霞のすがたお

おもしろし
大島
相模灣の南、伊豆諸島の一。
沖の小島
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や、沖の小島に波のよる見ゆ。源實朝。（金槐集）
誰がよみたりし
初島
靜岡縣熱海町の東南海上約一二粁。
魚見が崎
靜岡縣熱海町の南端の岬。
日金・十國
靜岡縣田方郡にある山。
天空海濶



もしろく、大島が根に立つ煙の春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし、初島わたり漕ぐふなうたの、寄る浪ごとに聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより、渚をつたうて、砂白く松青きほとり、濱千鳥のむれ飛ぶさまもいとをかし。後ろには日金・十國の山々を負ひ、前には天空海濶の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかく〳〵に及び難し。

清見が關
静岡縣興津町（附近）平安朝時代の關址。

三保の松原
駿河灣に斗出した一條の砂洲。

田子の浦
富士川口の海岸。

江尻・清水
今清水市。

龍華寺
清水市村松にある日蓮宗の寺。

深くや、
清見潟
静岡縣興津町附近の海岸、往古清水寺附近に清見關を置かれた。

篩

二 三保の春

彌生の初、我熱海を去りて、清見が關の古跡を訪ひぬ。松風遠く吹き合はせて、波の音もかすかなる、物思ひまさる夕なりき。我ひとり宿を立出でて、三保の松原に遊ぶ。入日の影は雲にのみ殘りて、月未だ上らず。田子の浦曲の夕なぎに、千鳥の聲もいと稀なり。江尻・清水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を右手に見つ。袂に寒き山風に、入相の鐘を吹き送りて、初春のあはれ一入深くや。三保に辿り著ける頃は、月漸く上り、清見潟の水煙は關路遙かに立ちこめて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せば一帶の松林、木深くも生ひ茂れるかな。木立の篩へる月の明

殘んの雪

ゆかり

文法
つ（助動詞）
樂し
枯る
添ふ
漸く

りに、殘んの雪の色冴えて、杜の下道杳なる、霞に落つる影もなし。波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添うて立ちぬ。羽衣の松は、わが年久しく思ひこがれしものなりき。よしさらば、今宵は月と共に立明さんかな。松は早く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。その下にゆかりを誌せる石碑ありしが、月の光朧にして見えわかず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔にかはらざりける。

三保の松原

（樗牛全集）

二三春の草

三木露風

萌えよ、〳〵、春の草、
生ひよ、〳〵、野邊の草。
あたらしき夢をはぐくみて、
春のいのちをのばせかし。

ながき眠の冬の土、
いつしか覺めてよみがへり、
芽をふく千草八千ぐさの
生の力の不思議さよ。

小川の水はぬるみたり、
日は晴れ空は薄がすみ、
つぐみや、ひわや、鶯や、
さやかにあそぶ彌生月。

萌えよ、〳〵、春の草、
生ひよ、〳〵、野邊の草。
綠のしとねをしきつらね、
若きいのちを飾れかし。

（青き樹かげ）

二三　靈器日本刀

中山博道

中山博道　石川縣の人、明治六年生、劍道範士。

神州正大の氣云々　藤田東湖の正氣歌の一節。

闡明

神州正大の氣、發しては萬朶の櫻となり、凝つては百錬の鐵となる。實に日本刀こそは、富士と櫻の自然美を有する我が國に在つて、科學的・精神的に、全世界に向つて誇示するに足る偉大なる存在である。併しながら、秋水滴るばかりに、明玉の上、一點の塵をも止めぬ日本刀の崇高さは、ひとり日本人のみが有する日本魂の力に依つてのみ鍛錬せられるものであつて、他の外國人が如何に發達せる科學の力を以てしても、容易に之を闡明し、鍛錬し得られぬ一種獨特の靈器である。　卽ち我が日本刀は古來、

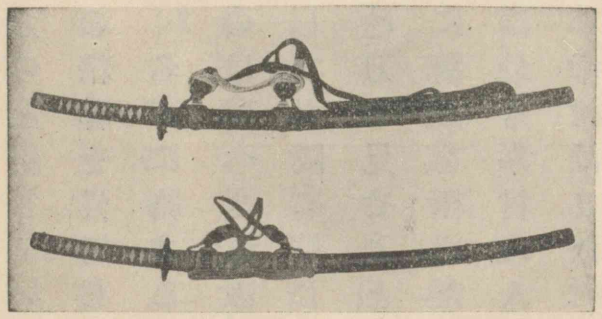
鍛冶

鯨鯢

魑魅

兜器

「兵器は神器也、之を小にしては一身・一家を修め、之を大にしては治國平天下の礎となる。」といふ精神の下に鍛錬せられたもので、徒らに人を斬る爲に鍛冶されたものではなく、寧ろ外敵を防ぎ、身を護る爲の器に外ならぬのである。



鞘卷太刀（名物式部正宗）

所謂、之を佩いて海に泛べば正に鯨鯢も伏し、之を佩いて夜行かば魑魅も逃げるといふ靈性こそ、日本刀に籠る眞精神である。　然るに支那などでは、「兵器は兜器也、故に刀劍は不吉也。」と稱し、また西

正宗
岡崎五郎入道、鎌倉時代末期より建武にかけての名刀匠、康永二年(一三〇三)歿、年八十一。

眞田幸村
豐臣秀吉の臣、元和元年(一六一五)歿、年四十六。

大野治長
豐臣秀吉及び秀頼の臣、元和五年(一六一九)歿。

貞宗
鎌倉の刀匠、五郎正宗の養子。

村正
貞治(一三六二—一三七〇)頃の人、伊勢國(三重縣)桑名の刀匠。

洋では之を單なる殺人器視して居る。之を觀ても日本刀の冠絶して居る所以は、そも〳〵鍛錬の初からして、其の精神を異にしてゐるのである事が知られるであらう。

名刀に絡まる物語は澤山あるが、特に正宗に關するものは數へきれぬ程ある。眞田幸村が九度山を下り、變裝して大阪に投じた時、大野治長の邸で、家臣から冷遇を受け、刀を見せよといはれたのに對し、大は正宗、小は貞宗、共に精妙を極めた名作を示して一座を驚倒せしめた挿話は、最も幸村の人柄を想はせるものである。

幸村はまた村正をも愛して、戰陣に臨む時は常に佩用した。村正がどういふ因縁か、德川一族に禍をするとて、

禍

慶長
紀元(一三五六—一三七四)。

元和
紀元(一三七五—一三八三)。

寛文・延寶
寛文(一三三一—一三三三)。延寶(一三三三—一三四〇)。

凌

虎徹
近江國(滋賀縣)の名刀匠、寛文・延寶中の人。

近藤勇
名は昌宜、武藏國(東京府)石田村の人、江戸幕府の臣、明治元年歿。

寡作

助眞
備前國(岡山縣)福岡の刀匠、建長(一九〇九)正和(一九七二)頃の人。

私淑

家康が家臣に佩用を禁じたといふのにも、多少據り所があつたかも知れぬ。この村正は、德川氏に忌まれた代りには、幕末の志士に好んで帶びられた。

慶長・元和を境として、以前の作を古刀と呼び、以降の作を新刀と名づける。

總じて新刀は古刀に比すると、作が劣るとされてあるが、それでも寛文・延寶頃の長曾禰虎徹興里や、奇士大村加卜の物には、古刀を凌ぐ名作があつた。虎徹は幕末新撰組の隊長近藤勇が愛用したといふので、近頃一層有名であるが、加卜のものは寡作の點で、一層一部に珍重された。

加卜は、藤源次助眞に私淑し、眞十五枚甲伏の鍛法を研

究して、その眞髄に徹し得たと信じ、「おれの打つ刀は、火神水靈の威力によつて、鐵が生きてゐるから、活劍といふのだ。一般世上の鍛法は、皆鐵の精靈を殺してしまふから、いはば鐵の亡者だ。生きた人間は斬れぬ。」と、豪語した。また、「おれは武士だ。渡世でないから多くは作らぬ。」と言つて、一代に僅か百振ほどしか作らなかつた。そして、どんな處から賴まれた刀でも、決して代物を受けなかつた。「價さへ貰はねば、望み手は多くても、無心をいふ者はない。氣の向いた時の外、多く作らなくとも濟む。」と、いふのだつた。

刀劍武用論を提唱し、復古鍛法を研究大成して、新刀鍛

寛政
紀元(二四四九—二四六〇)。

水心子正秀
姓は川部、通稱は義八郎、出羽國(山形縣)の刀匠、文化六年(二四六九)歿、年六十一。

卸
細川正義
下野國(栃木縣)の刀匠。

庄司直胤
出羽國(山形縣)の刀匠。

山浦清麿
武藏國(東京府)の刀匠、安政三年(二五一六)歿、年四十六。

軈
劍太刀云々
萬葉集卷十一にある歌。

治の中興といはれたのは、寛政年間出羽出身の水心子正秀である。卸し鍛への復活で、この門からは細川正義・庄司直胤等の名工が現れ、その系統を引いて、別にみづから相州傳を探究し、四谷正宗と異名を呼ばれた、信州出身の山浦清麿あたりを、新刀最後の名匠として、軈て明治維新となつた。其の後の作は新々刀と呼ばれる。

劍太刀諸刃の利きに足踏みは
死にも死になん君に依りては

と詠まれて、三千年の誇を持つた日本刀も、明治九年廢刀令以來、全く衰微したといふやうな說もあるが、實は之に依つて、從來單に個人として自身の爲又は其の主の爲に

のみ佩びられた日本刀が、形の上に於ては、各人の腰間から其の姿を消しはしたが、同時に精神的には、國民一般の胸に藏められる處のものとなつたのであるといふ事が言へる。其の最もいゝ例としては、國民皆兵卽ち一朝事ある場合は、全國民悉く此の日本刀の有する精神を魂として、外敵に備ふるに至つた事を擧げる事が出來る。卽ち廢刀令は、個人の刀をして、國民の刀たらしめ給へる明治大帝の思召しに外ならぬであらうと、畏れながら拜察する。なほ、古名匠の作品で、現存するものは尠くない。日本魂、武道の象徴として今に傳へられる此等の作品を、世界大戰當時、武器の精鋭を必要とする交戰諸國の專門

家が、貴重な研究資料とした事は有名であるが、日本刀に籠る名匠の日本魂は、流石に科學の力では發見する事は出來なかつたやうである。而して日本刀の最も優れたる特質として、外國人の常に讃嘆して居る點は、外國製の刀劍類は、如何に精鋭を誇るものと言へども、一度其の切れ味を失へば、更に研ぎ合せざる以上、再び利器としての鋭さを回復し得ぬのに反して、わが日本刀の切れ味は、數百年を經過しても更に鈍らず、永久不變に其の鋭利さを保つといふ科學上不可解の靈性を具へて居る事である。繰返していふ、此の靈性を有する日本刀こそは、神州の精氣であり、誇るべき日本魂の根源である。

（修養全集）

二四　皇室と國民

芳賀矢一

芳賀矢一
福井市の人、國學者、文學博士、前國學院大學長、昭和二年歿、年六十二。

我が國は開闢以來君臣の分がさだまつて居るといふことは、歴史上の事實の説明を待たずして、有史以前から我が民族の腦裏に沁み渡つた思想である。

試みに神話を見よ。八百萬の神はあつたが、我が天孫にむかつて敵對行動を取つたものは無い。いづれもおとなしい忠義な神で、天つ神も國つ神も、日神の御子孫の事業を輔翼する事をのみ力めて居る。その事業を妨害したり、又はその國土を奪ひ取らうなどとするものは、一人も無い。誠に平和な神話である。此の神話は、我が太古の國民の心性を反映したものではないか。

この太古の國民の精神には、あきらかに君臣の分がさだまつて居る。天孫の御血統が卽ち帝位を繼ぐべき種で、其の餘の者は、皆此の國土に居て、その下に服從すべき種とさだまつて居る。皇室は一種別なものである。私等國民よりは一段高いものである。これは「カミ」である長上である。神である。柿本人麻呂が、「大君は神にしませば」と歌つたのも、「カミ卽ち神」といふ上代思想を言ひ表したのである。帝國憲法第三條に、「天皇は神聖にして侵すべからず」とあるは、よく太古以來の國民の心を表したものである。

妨害

柿本人麻呂
持統・文武の二朝に仕ふ、萬葉時代の歌人、天平元年(一三八九)歿。

大君は云々
大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも。(萬葉集)

皇室に對して敬虔の念を有することは、このとほりであるが、たゞ神として恐れ畏むばかりではない。皇室の事を「オホヤケ」といふのは、大家の義である。皇室に對しては、私達は小家である、卽ち皇室は私等の本家。宗家であるといふ考があつた。この思想の中には、皇室と國民との間に、多くの親愛の意味がこもつて居る。統治者と被治者といふ關係ではなくして、心の底から上下互に親睦してゐる趣がある。八百萬の神は、皇孫の事業を翼賛する方々ばかりであるが、義理づくに服從して恐れて居るのではない。大本家の統領として、尊敬して居るのである。兩者は、親子的關係で結合して居たのである。子と

しては、親の命令を聽かねばならぬ。親の心を喜ばせねばならぬ。親からは何を與へられてもうれしい。親子の愛情は人の至情で、これが「マゴコロ」である。この「マゴコロ」が卽ち忠である。忠といふ語は漢字の音であるが、日本語に譯すれば、「マゴコロ」とするより外にあるまい。日本では忠も孝も同じ事で、どちらも同じく「マゴコロ」である。

この「マゴコロ」を以て皇室に對するのが、國民の情である。神のやうに尊んで、神のやうに畏れ、親のやうに賴みにして、親のやうにありがたく思ふ。それゆゑ、天皇の命とあれば、どんな事でも服從する、どんな事でもいひつけ

を聽く。いやく〳〵するのではない。有難がつてするのである。身命も喜んでさし出すのである。

この「マゴコロ」、卽ち皇室に對する神の觀念が、武家時代に至つては、轉じて主從の關係の連鎖となつた。是が卽ち武士道の精髓となつたのである。自分の事へる主君には「マゴコロ」をつくす、卽ち忠をつくして身命を惜しまず、事ある時は馬前に討死するのが、家來たる者の心掛となつた。

武士道は士の守るものであつたが、この精神はいつしか武士といはず、町人といはず、男といはず、女といはず、一般國民の間に擴がつてしまつた。「奉公」といふことは、元

來朝廷だけに對する事であつたが、通常の雇人にも、「奉公人」といふ語を用ふる樣になつた。其の本をたゞせば、君臣の關係が主從の關係にうつされた結果である。併し、主從といつても、其の關係は、どうしても君臣の關係程にはないのである。もとく〳〵君臣の關係を、主從に借りてうつしたのであるから、從は主を、國民一般が皇室に對する樣に、全く別人種とは考へない、神と同一には考へない、權力なり、恩義なりの爲に服從するとの考は失せなかつた。

一旦主從の關係にうつされた忠の解釋は、明治の維新とともに、再び昔のとほり、皇室に對するものと限られて

犧牲

しまつた。否、明治の維新そのものは、その解釋を皇室に限るものとして、德川幕府を打倒したのであつた。維新後は、士・農・工・商は皆平等になつて、こゝに一般國民が兵役に就くことになつた。陪臣・陪々臣の制度は廢せられて、いづれも天朝直參の臣となつた。久しい間武家で養成した武士道的精神は、今や天朝にむかつてのみ捧げられる事になつた。武士・町人にも行き渡つて、小說・淨瑠璃の平民的文學にも反映して居る從の主に對する犧牲的精神は、今や國家の爲に身命を拋つ愛國の精神となつたのである。

政體幾たびも變り、王室屢、更代する外國では、古來の歷史を思念させ、國家的觀念を養成する必要上、獨逸ではゲルマニア、英國ではブリタニカ、佛國ではガリアといふ空想的人物を拵へて居る。ところが、我が日本では、國土と皇室とは、神代以來已に離るべからざるものであつて、國のため家のためといふ事は、同一の意味と解釋される。「朕は卽ち國家なり」とは、我が國の天皇にして始めて宣ふことの出來る詞である。

五訂

新日本讀本 卷四 （終）

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二五五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮候侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光克免兎兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗【冫】冬冷凉准凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刄分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】匿【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厥【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善啖喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執埼基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壤【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬

思 恩 恭 悔 悟 悖 悲 惟 悼
思 急 急 性 怨 怪 怯 恐 恥 恨
必 忌 忍 志 忘 忙 忠 快 念 怒
從 御 復 微 徵 德 徹 【心】心
彼 往 征 待 律 後 徐 徑 徒 得
【彡】形 彩 彫 影 彰 【彳】役
【弓】弓 弔 引 弟 弱 張 强 彈
建 廻 【廾】弄 弊 【弋】式
康 廉 廊 廢 廣 廳 【廴】延 廷
床 序 庶 店 府 庭 座 庫 庭 庶
平 年 幸 幹 【幺】幻 幼 幾 【广】
帳 帶 常 帽 幅 幕 幣 【干】干
【巾】市 布 帆 希 帝 帥 師 席
【工】工 左 巧 巨 差 【己】己
【巛】川 州 巡 巢
【山】山 岡 岩 岳 岸 峠 峰 島
峽 崇 崎 崩

情 惑 惜 惠 惡 惰 惱 想 愁 愉
意 愚 愛 感 慈 慾 慕 慘 慢 慎
慣 慨 慮 慰 慶 慾 憂 憐 憚 憲
憶 憾 憤 憂 應 懲 懷 懸 戀
【戈】成 我 戒 戰 戲 戴 【戶】
戸 戻 房 所 扇 【手】手 才 打
扱 扶 批 承 技 抑 投 抗 折 抱
抵 押 披 抽 拂 拍 拒 拓 拔 拘
拙 招 拜 括 拳 拾 持 指 振 捕
捧 描 捨 掃 授 掌 排 掛 探 探
控 推 揚 接 提 換 握 揮 揭 揮
援 損 搖 搜 摘 携 摩 撫 撐 撃
操 擔 據 擬 擴 攝 【支】支
【攵】收 改 攻 放 政 故 敍 敎
敏 救 敗 敢 散 敬 敵 敷 數 整
【文】文 【斗】斗 料 斜 【斤】

【欠】次 欲 款 歎 歌 歡 歐 歡
樣 樹 橋 機 橫 檢 檢 樂 樓 標 樞 模 權
業 極 榮 構 概 樂 樓 標 樞 模 權
梨 械 棄 棋 棒 棟 森 棺 植 楠
株 根 格 栽 桃 案 桐 桑 梅 條
柄 某 染 柔 歪 柩 柱 柳 栗 校
東 松 板 枕 林 枚 果 枝 枯 架
札 朱 机 朽 杉 村 村 束 柿 杯
朗 望 朝 期 【木】木 未 末 本
替 最 會 【月】月 有 朋 服 朕
曆 曇 曜 【曰】曲 更 書 曹 曾
景 晴 晶 智 暇 暖 暗 暑 暮 暴
星 春 昭 昨 是 映 時 晩 晝 普
旦 旨 早 旬 旭 昇 昌 明 易 昔
旋 族 族 旗 【无】既 【日】日
斤 斥 斬 新 斷 斯 【方】方 施

【止】止 正 此 歩 武 歳 歴 歸
【歹】死 殊 殉 殖 殘 【殳】段
殺 殿 毀 【毋】母 每 毒 【比】
比 【毛】毛 【氏】氏 民 【气】
氣 【水】水 氷 永 汁 求 汗 汚
江 池 決 汽 沈 沒 沖 沙 汰 河
沸 油 治 沼 沿 況 泉 泊 法 波
泣 泥 注 泰 泳 洋 洗 津 洪 活
派 流 浦 浪 浮 浴 海 浸 消 涉
液 淑 涙 淡 淨 淫 深 混 清 淺
添 減 淵 渡 溫 測 港 渴 湖 湧
湯 源 準 溢 溶 溺 滅 滋 滑 滯
滴 滿 漁 漂 漆 漏 演 漕 漠 漢
漫 漸 漱 潛 潮 澤 激 濁 濃 濕
【火】火 灰 災 炊
濟 濱 瀧 灣 炎 炭 烈 無 然 煩 煮 煙 照 煩

【爪】爪 爭 爲 爵 【爻】爻 爾
熟 熱 燃 燈 燒 營 爆 爐
【牛】牛 牧 物 牲 特 犠 【犬】犬 犯
【片】片 版 牌 【牙】牙
狀 狂 狩 狹 猛 猫 猶 獄 獨 獲
獵 獻 獻 【玄】玄 率 【玉】玉
王 玩 珍 珠 班 現 球 理 琴 環
璽 【瓦】瓦 瓶 【甘】甘
甚 【生】生 産 甥 【用】用
【田】田 由 甲 申 男 町 界 畏
畑 畜 畝 略 番 畫 異 畳 當 疊
【疋】疋 疎 疑 【疒】疫 疲 疾
病 症 痘 痛 痢 療 癖 【癶】登
發 【白】白 百 的 皆 皇 【皮】
皮 【皿】皿 盆 盛 盜 盟 盡
盤 【目】目 盲 直 相 省 眉

情 惰 惜 惠 惡 惰 惱 想 愁 愉
憶 憾 憤 憂 應 懲 懷 懸 戀
【戈】成 我 戒 戰 戲 戴 【戶】
戸 戻 房 所 扇 【手】手 才 打
扱 扶 批 承 技 抑 投 抗 折 抱
抵 押 披 抽 拂 拍 拒 拓 拔 拘
拙 招 拜 括 拳 拾 持 指 振 捕
捧 描 捨 掃 授 掌 排 掛 探 探
控 推 揚 接 提 換 握 揮 揭 揮
援 損 搖 搜 摘 携 摩 撫 撐 撃
操 擔 據 擬 擴 攝 【支】支
【攵】收 改 攻 放 政 故 敍 敎
敏 救 敗 敢 散 敬 敵 敷 數 整
【文】文 【斗】斗 料 斜 【斤】

【欠】次 欲 款 歎 歌 歡 歐 歡
樣 樹 橋 機 橫 檢 檢 樂 樓 標 樞 模 權
業 極 榮 構 概 樂 樓 標 樞 模 權
梨 械 棄 棋 棒 棟 森 棺 植 楠
株 根 格 栽 桃 案 桐 桑 梅 條
柄 某 染 柔 歪 柩 柱 柳 栗 校
東 松 板 枕 林 枚 果 枝 枯 架
札 朱 机 朽 杉 村 村 束 柿 杯
朗 望 朝 期 【木】木 未 末 本
替 最 會 【月】月 有 朋 服 朕
曆 曇 曜 【曰】曲 更 書 曹 曾
景 晴 晶 智 暇 暖 暗 暑 暮 暴
星 春 昭 昨 是 映 時 晩 晝 普
旦 旨 早 旬 旭 昇 昌 明 易 昔
旋 族 族 旗 【无】既 【日】日
斤 斥 斬 新 斷 斯 【方】方 施

【止】止 正 此 歩 武 歳 歴 歸
【歹】死 殊 殉 殖 殘 【殳】段
殺 殿 毀 【毋】母 每 毒 【比】
比 【毛】毛 【氏】氏 民 【气】
氣 【水】水 氷 永 汁 求 汗 汚
江 池 決 汽 沈 沒 沖 沙 汰 河
沸 油 治 沼 沿 況 泉 泊 法 波
泣 泥 注 泰 泳 洋 洗 津 洪 活
派 流 浦 浪 浮 浴 海 浸 消 涉
液 淑 涙 淡 淨 淫 深 混 清 淺
添 減 淵 渡 溫 測 港 渴 湖 湧
湯 源 準 溢 溶 溺 滅 滋 滑 滯
滴 滿 漁 漂 漆 漏 演 漕 漠 漢
漫 漸 漱 潛 潮 澤 激 濁 濃 濕
【火】火 灰 災 炊
濟 濱 瀧 灣 炎 炭 烈 無 然 煩 煮 煙 照 煩

【爪】爪 爭 爲 爵 【爻】爻 爾
熟 熱 燃 燈 燒 營 爆 爐
【牛】牛 牧 物 牲 特 犠 【犬】犬 犯
【片】片 版 牌 【牙】牙
狀 狂 狩 狹 猛 猫 猶 獄 獨 獲
獵 獻 獻 【玄】玄 率 【玉】玉
王 玩 珍 珠 班 現 球 理 琴 環
璽 【瓦】瓦 瓶 【甘】甘
甚 【生】生 産 甥 【用】用
【田】田 由 甲 申 男 町 界 畏
畑 畜 畝 略 番 畫 異 畳 當 疊
【疋】疋 疎 疑 【疒】疫 疲 疾
病 症 痘 痛 痢 療 癖 【癶】登
發 【白】白 百 的 皆 皇 【皮】
皮 【皿】皿 盆 盛 盜 盟 盡
盤 【目】目 盲 直 相 省 眉

結 紀 紡 結 絶 絡 給 流 絲 絹 經 綠 維
綱 約 棄 紫 異 細 紳 紹 紺 總 組
綴 紅 紋 納 純 紙 級 紛 素
綻 粒 粘 粗 粹 精 糟 糞 【米】米 粉
綿 範 築 篤 簡 簿 籍
緊 筆 等 筋 筒 答 策 算 管 箱 節
緒 端 競 【竹】竹 竿 笑 笛 符 第
線 窈 窒 窓 窮 【立】立 章 童
締 突
緣 看 貫 眠 眼 着 睡 督 【矢】矢

知 短 【石】石 砂 砲 破 研 硬
硯 碁 碎 碑 確 磁 磨 礎 【示】
示 社 祈 祝 祖 祝 神 票 祭 禁
禍 福 禦 禮 【禾】秀 私 秋 科
秒 租 秩 移 稅 程 稚 種 稱 稲
稿 穀 積 穂 穏 【穴】穴 究 空
突 窮 窒 窓 窮 【立】立 章 童
端 競 【竹】竹 竿 笑 笛 符 第
筆 等 筋 筒 答 策 算 管 箱 節
範 築 篤 簡 簿 籍 【米】米 粉
粒 粘 粗 粹 精 糟 糞 【糸】系
紀 約 紅 紋 納 純 紙 級 紛 素
結 絶 絡 給 流 絲 絹 經 綠 維
綱 約 棄 紫 異 細 紳 紹 紺 總 組
綴 紅 紋 納 純 紙 級 紛 素
綻 粒 粘 粗 粹 精 糟 糞 【糸】系
綿 範 築 篤 簡 簿 籍 【米】米 粉
緊 筆 等 筋 筒 答 策 算 管 箱 節
緒 端 競 【竹】竹 竿 笑 笛 符 第
線 窈 窒 窓 窮 【立】立 章 童
締 突
緣 看 貫 眠 眼 着 睡 督 【矢】矢

知 短 【石】石 砂 砲 破 研 硬
硯 碁 碎 碑 確 磁 磨 礎 【示】
示 社 祈 祝 祖 祝 神 票 祭 禁
禍 福 禦 禮 【禾】秀 私 秋 科
秒 租 秩 移 稅 程 稚 種 稱 稲
稿 穀 積 穂 穏 【穴】穴 究 空
突 窮 窒 窓 窮 【立】立 章 童

編 緩 緯 練 縛 縣 縫 縮 縱 總
績 繁 織 繕 繪 繭 繰 繼 續
【缶】缺 【网】罪 置 署 罰 罵
羅 【羊】羊 美 羹 羨 【羽】
羽 翁 翌 習 翼 【老】老 考 者
【而】耐 【耒】耕 【耳】耳 聖
聞 聯 聲 職 聽 【聿】肅 肇
【肉】肉 肖 肝 股 肥 肩 肯 肺
胃 背 胎 胞 胴 胸 能 脅 脈 脊
脚 脫 脇 脚 腦 腰 腸 腹 膚 膜
膳 臆 膺 臟 【臣】臣 臥 臨
【自】自 臭 【至】至 致 臺
【臼】興 興 舉 舊 【舌】舌 舎
【舞】舞 【舟】舟 航 般 舵 舶
船 艦 【艮】良 【色】色 【艸】
芝 花 芽 芳 苑 苗 若 苦 英 茂

茶 草 荒 荷 莊 羽 菌 菓 菜 華
萬 落 葉 著 葬 蒙 蒸 蓄 夢 薄
藏 藝 藤 藥 【虍】虎 虐 處 虛
號 【虫】蚊 蛇 蛙 蜂 蜜 融 蟲
靈 蠻 【血】血 衆 【行】行 術
街 衝 衛 衛 【衣】衣 表 義 袋
袖 被 裁 裂 裏 裕 補 裝 裸 製
複 褒 襲 【西】西 要 覆 【見】
見 規 視 親 覺 覽 觀 【角】角
解 觸 【言】言 訂 計 討 訓 託
記 訟 訪 設 許 訴 診 詐 詔 評
詞 詠 試 詩 詰 話 詳 誇 誌 認
誓 誕 誘 語 誠 誤 說 課 調 談
請 論 諭 諸 諸 謀 謁 諮 講 謝
謙 謹 證 識 譜 警 譯 議 護
讀 變 讓 【谷】谷 【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費貿賀賃賄資賊
賓賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輸輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【辵】辷迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通
速造連週進逸遂遇遊運
過道達違遙遞遠遣適遭
遲遷選遺避還邊邂【邑】
邦邪邸郊郎郡部郵都鄕
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛
【長】長【門】門閉開閑問
閣閲關【阜】防附降限陛
院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈
【靑】靑靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頓預頑領頭頻題
額顏願顚類顧顯【風】風
【飛】飛翻【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首
【香】香【馬】馬馳駁駄駐
騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨
體【高】高【髟】髮【鬥】
鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、だし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと（四）外來語は假名で書くこと。

略字表

（臨時國語調査會發表）

左の字體を本位として用ひること。
（括弧内の小字は字典體）

勸（勸）権（權）潅（灌）歓（歡）観（觀）
沢（澤）択（擇）訳（譯）駅（驛）釈（釋）
変（變）恋（戀）蛮（蠻）湾（灣）
茎（莖）径（徑）経（經）軽（輕）
併（倂）塀（塀）瓶（瓶）餅（餠）研（研）
斉（齊）斎（齋）済（濟）剤（劑）
残（殘）浅（淺）賤（賤）銭（錢）
労（勞）営（營）栄（榮）学（學）覚（覺）

挙（擧）誉（譽）断（斷）継（繼）
歯（齒）齢（齡）湿（濕）顕（顯）
窓（窗）総（總）属（屬）嘱（囑）
為（爲）偽（僞）帯（帶）滞（滯）
参（參）惨（慘）両（兩）満（滿）
発（發）廃（廢）鼠（鼠）猟（獵）
乱（亂）辞（辭）潜（潛）賛（贊）
走（走）徒（徒）従（從）縱（縱）
悩（惱）脳（腦）処（處）拠（據）
担（擔）胆（膽）来（來）麦（麥）
寿（壽）鋳（鑄）数（數）楼（樓）

楽（樂）	薬（藥）	読（讀）	続（續）
竜（龍）	滝（瀧）	随（隨）	髄（髓）
麻（麻）	麗（麗）	聴（聽）	廳（廳）
虚（虛）	戯（戲）	遅（遲）	解（解）
独（獨）	触（觸）	畳（疊）	摂（攝）
虫（蟲）	蚕（蠶）	仮（假）	児（兒）
励（勵）	嘗（嘗）	国（國）	囲（圍）
円（圓）	図（圖）	壱（壹）	実（實）
写（寫）	宝（寶）	扣（控）	叙（敍）
条（條）	様（樣）	帰（歸）	気（氣）
炉（爐）	犠（犧）	献（獻）	画（畫）

畄（留）	尽（盡）	礼（禮）	称（稱）
糸（絲）	欠（缺）	声（聲）	台（臺）
旧（舊）	万（萬）	号（號）	証（證）
豊（豐）	弁（辨辯）	逓（遞）	辺（邊）
医（醫）	鉄（鐵）	関（關）	双（雙）
霊（靈）	余（餘）	舘（館）	体（體）
塩（鹽）	点（點）	覚（覺）	
闘（鬪）	刺（刻）	亀（龜）	

略字表 終

文語動詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段	(著)	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネヨ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	(來)	コ	キ	ク	クル	クレ	コヨ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ

文語形容詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シキ	シケレ

口語動詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
四段	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
四段	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
上一段	(著)	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ(ロ)
上一段	兼	ネ	ネ	ネル	ネル	ネレ	ネヨ(ロ)
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ(ロ)
カ行變格	(來)	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	(爲)	セ(シ)	シ	スル	スル	スレ	セヨ(シロ)

口語形容詞活用表

活用の種類	語根	活用形 未然	連用	終止	連體	假定
ク活用	清	—	ク(ウ)	イ	イ	ケレ
シク活用	涼	—	シク(ウ)	シイ	シイ	シケレ

文語助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	已然	命令	
受身 可能 尊敬	る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段活用
	ら							
使役 尊敬	す	せ	せ	す	する	すれ	せよ	
	さす							
	しむ	め	め	む	むる	むれ	めよ	
時	つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ	
	ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ變
	り	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行變格活用
	たり							
	けり							
指定	たり	ら	り	り	る	れ	れ	
	なり							
否定	ざり	ら	り	り	る	れ	れ	
	べかり	ら	り	り	—	—	—	
推量	べし	く	く	し	き	けれ	—	形容詞活用
	らし							
	まじ							
比況	ごとし	く	く	し	き	—	—	
希望	たし	く	く	し	き	けれ	—	
否定	じ	—	—	じ	じ	じ	—	特種活用
	ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	—	

口語助動詞活用表

助動詞の種類	語	活用形 未然	連用	終止	連體	假定	命令	
受身 可能 尊敬	れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ	下一段活用
	られる							
使役 尊敬	せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ	
	させる							
否定	ない	—	く	い	い	けれ	—	形容詞活用
希望	たい							
推量	らしい							
時	た	たら	た	た	た	たれ	—	特種活用
指定	だ	だら	だつ	だ	—	—	—	
推量	まい	—	—	まい	—	—	—	
推量	う	う	う	う	—	—	—	
	よう							

文語助動詞活用表

動詞	一 い音便	防ぎて(書きて)—い
	二 う音便	言ひて—う
	三 撥音便	飛びて(死にて)—ん 積みて
形容詞	一 白き花—い	
	二 甘くなる—う	
	三 重くす—ん	

略字表 終

口語助動詞連續法

體言	サ變	カ變	下一段	上一段	四段	
花	爲(し)せる れる ない ぬ させる られる ようまい	來(こ)る	捨て	落ち	書か う	未然形につくもの
花	爲(し)	來(き)	捨て	落ち	書き	連用形につくもの
花	爲る ます たい	來る	捨てる	落ちる	書く まい	終止形につくもの
花	爲る らしい	來る	捨てる	落ちる	書く	連體形につくもの
花	爲る のだ のです やうだ やうです	來る	捨てる	落ちる	書く	

文語助動詞連續法

體言	サ變	カ變	下一段	下二段	上一段	上二段	ナ變	四段	ラ變	
花	爲(せ)	來(こ)	蹴	受け	著	起き	死な	讀ま	有ら	未然形につくもの
	り さす らる						ずましむじざりまほし		る す	
花	爲(し)	來(き)	蹴	受け	著	起き	死に	讀み	有り	連用形につくもの
			たりたし	け り つ	ぬ(はつじ)(かぬ)ナ變に	き(カ變・サ變は特例)			けむ	
花	爲(す)	來(く)	蹴る	受く	著る	起く	死ぬ	讀む	有り	終止形につくもの
			めりまじなり(咏嘆)	らし	らむ	べし	べから			
花	爲る	來る	蹴る	受くる	著る	起くる	死ぬる	讀む	有る	連體形につくもの
								まじりめしらんからべべし		
				如し		なり(指定)				
花	爲れ	來れ	蹴れ	受くれ	著れ	起くれ	死ぬれ	讀め り	有れ	已然形につくもの

推量		時		否定		希望	比況	推量			否定	指定		時				崇敬		
ら む	け む	む	き	じ	ず	たし	ごとし	まじ	らし	べし	べかり	ざり	なり	たり	けり	たり	り	ぬ	つ	しむ
—	—	—	—	—	ず	く	く	く			ら	ら	ら	ら				な	て	め
—	—	—	—	—	ず	く	く	く			り	り	り	り				に	て	め
む	む	む	き	じ	ず	し	し	○	○	し	り	り	り	り				ぬ	つ	む
む	む	む	し	じ	ぬ	き	き	き			—	る	る	る				ぬる	つる	むる
め	め	め	しか	じ	ね	けれ	—	けれ			—	れ	れ	れ				ぬれ	つれて	むれ
—	—	—	—	—	—	—	—	—			—	れ	れ	—				ね	てよ	めよ
用活種特						用活詞容形					用活格變行ラ							ナ變	用活	

推量	時		指定	時	希望	推量	否定	使役	
まい	よう	う	だ	た	たい	らしい	ない	させる	
—	—		だらだつ	たら		—		せ	
—	—		だ	た		く		せ	
まい		う	だ	た		い		せる	
—	—		—	たれ		いけれ		せる	
—	—		—	たれ		けれ		せれ	
—	—		—	—		—		せよ	
用活種特					用活詞容形			用	

動詞

一 い音便 — 書き(て) 防ぎ(て) — い

二 う音便 — 言ひ(て) — う

三 撥音便 — 死に(て) 飛び(て) 積み(て) — ん

四 促音便 — 立ち(て) 買ひ(て) 破り(て) — つ

形容詞

一 白き花 — い

二 甘くなる — う

三 重くす — ん

接續助詞と動詞・形容詞との接續法

	動詞	形容詞
未然形	ば で	ば とも
連用形	て つつ	
終止形	と とも	
連體形	(と) (とも) が を に	が を に
已然形	ば ど ども	ば ど ども

昭和九年十一月二十六日

文部省檢定濟

中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

大正十四年十月十三日發行
昭和三年七月廿三日訂正三版發行
昭和六年七月卅一日訂正五版發行
昭和九年七月二十日訂正七版印刷
昭和九年十月廿八日訂正八版印刷

大正十五年一月五日訂正再版發行
昭和三年十一月五日訂正四版發行
昭和六年十一月二十日訂正六版發行
昭和九年七月廿八日訂正七版發行
昭和九年十一月三日訂正八版發行

定價
卷一—八 各金六拾錢
卷九—十 各金五拾五錢

五訂 新日本讀本

編者 吉澤義則 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

發行兼印刷者 鈴木金之助 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

發行者 鈴木常松

發兌 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一 振替口座東京二六四四番
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

修文館 振替口座大阪四七一番